



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文化を読み直す――退職記念講演録（CATS叢書；第2号）全1冊
Author(s)	大平, 具彦
Relation	文化を読み直す――退職記念講演録 / 大平具彦著 = Rereading the Culture : Valedictory Lectures / Tomohiko OHIRA
Citation	CATS叢書, 2
Issue Date	2009-06-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38686
Type	journal
File Information	CATSLibrary02.pdf



文化を読み直す

— 退職記念講演録

大平具彦

CATS 叢書

第2号

北海道大学

観光学高等研究センター

本書に関する一切の著作権は、大平具彦に帰属し、クリエイティブ・コモンズの「表示-非営利-継承 2.1 日本ライセンス」の下でライセンスされています。



出典を明記された上での学術・非営利目的の引用はこれを禁じるものではありません。

詳しい利用条件に関してはライセンスページ記載事項

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/>

をご参照ください。

CATS 叢書 第2号

大平具彦
文化を読み直す
——退職記念講演録

北海道大学観光学高等研究センター

2009年6月15日

はじめに

このたび、退職を機に、2009 年 2 月から 3 月にかけて私が行った 2 回の記念講演を、CATS 叢書第 2 号に収めていただけることになった。石森秀三観光学高等研究センター長をはじめ同センターのスタッフ一同に深くお礼を申し上げたい。

収録した講演は次の 2 つである。

■退職記念講演

『ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造 ～観光創造を考えるための原石として～』

2009 年 2 月 27 日（金）15:20～16:20

北海道大学情報教育館 3 階スタジオ型多目的中講義室にて

（主催：北海道大学観光学高等研究センター）

■最終講義

『果てなき異邦人としての人間 一言葉・アート・心・生命と＜異郷＞』

2009 年 3 月 13 日（金）16:30～18:00

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 1 階 105 室にて

（主催：北海道大学メディア・コミュニケーション研究院）

最初の記念講演は、2007 年 4 月に観光創造専攻が設置されてから 2 年間、同専攻の国際地域文化論講座の一員として研究教育を行ってきた内容を、ラフカディオ・ハーンという切り口を通して語ったものであり、2 つめの最終講義は、北大に勤めて以来 30 年にわたってテーマにしてきたことを、「異郷」を軸に展開してみたものである。本号を手にとって下さった方々の何がしかの参考になってくれればありがたい。

なお本号に掲載する講演記録文章は、上記 2 回の記念講演の録音をもとに、山村高淑氏（北海道大学観光学高等研究センター）に原稿を作成していただき、それを私自身が校正したものである。また講演当日に会場で配布したものを、本叢書用に整形し添付資料として再録した。本号がこのような形で出来上がるまで、山村高淑氏には大変にお世話になった。衷心より感謝申し上げる。

大平 具彦

目次

はじめに i

退職記念講演

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
～観光創造を考えるための原石として～ 1

1. 講演録 3
2. 添付資料 17
 - 講演メモ 19
 - 資料 1 23
 - 資料 2 25

最終講義

果てなき異邦人としての人間
～言葉・アート・心・生命と＜異郷＞～ 31

1. 講義録 33
2. 添付資料 51
 - 講義メモ 53
 - 資料 57

退職記念講演

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造 ～観光創造を考えるための原石として～

2009 年 2 月 27 日（金） 15:20～16:20

北海道大学情報教育館 3 階スタジオ型多目的中講義室にて

（主催：北海道大学観光学高等研究センター）

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造

～観光創造を考えるための原石として～

大平具彦

今日の観光創造フォーラムには色々なプログラムがありまして、その中で私の担当するのは「旅とは何だろうか」という原論的な内容ということで、そうした観点からラフカディオ・ハーンを選んでみました。皆さんのお手元に資料（本書の pp. 17-29）があると思いますので、これに従って話を進めてゆこうと思います。

まず、なぜラフカディオ・ハーンなのか、という問題設定のところから話します。日本に帰化して小泉八雲となり、『怪談』をはじめ、日本の文化地層の深き理解者として知られるラフカディオ・ハーン。しかし日本に到着するまで、そして到着後も彼は、実は旅人の中の旅人でした。現に旅先の日本で、小泉節子という女性と結婚して名前まで変えてしまう、国籍も変えてしまう、そして定住してしまうという、まさに只者ではない旅人であります。後に見ますように、このラフカディオ・ハーンの内部では、旅先で吸収した世界中の文化地層が渾然となって渦巻いております。後ほどこれと関連させて述べますが、最近の 1980 年代 90 年代から、クレオールという思想がフランスを中心に文化論・思想論の立場から論じられるようになりました。どういうものかと言いますと、それまで近代文明というのは西洋を中心に進んできて、その一元的な原理が世界に波及していったのですが、そういう原理に代わって、世界には様々な文化があるわけだから、それらが異種混雑して新しい文化が創られてゆくという立場を、クレ奥ールの思想と呼んでいます。これから述べてゆきますが、ラフカディオ・ハーンは実はその先駆的な体現者でした。そうであれば、ラフカディオ・ハーンはイギリス、アイルランドといういわゆるアングロサクソンの出身なのですが、それまで世界を牛耳ってきた西洋的世界基準とは別の基準を提出したということが言えるわけでして、その点で高く評価される人です。そして彼は、日本においてもそうであったように、旅先で必ず新たな世界を創造し、また、それまでとは異なる自己を新たに創造してゆきます。そういう彼独特の体験をラフカディオ・ハーンの体験と呼ぶとすれば、それはいかなる体験なのか。そうであるのなら、このラフカディオ・ハーンの体験には、おそらく観光創造を考えるための

原石が豊かに眠っているのではないか、ということで、話をさせていただこうというわけです。お断りしておきますけれども、私はラフカディオ・ハーンの専門家ではありません。かつて大学院の授業で、文化の多様性というテーマでこのラフカディオ・ハーンを取り上げたことがありますして、色々読んでみるとなかなか奥が深く、私自身も大いに興味を抱くようになり、そうした経緯があって、本日、ラフカディオ・ハーンを選んでみたような次第です。

さて、では、ラフカディオ・ハーンの旅の足取りを先ず見ておきたいと思います。資料 1 (pp. 23-24) をご覧下さい。日本に到着するまでラフカディオ・ハーンはどういう旅をしてきたのか、その足取りを年代順にまとめておきました。生まれたのは 1850 年です。ギリシャのイオニア諸島レフカス島（レフカダ島）に生まれる。意外ですね。父はアイルランド出身で、イギリス軍の軍医。母はマルタ島生まれで、アラブの血も混じっていたと伝えられるギリシャ人です。すでに出生の時から文化的混血を体現しているということです。調べていて面白いなと思ったのですが、右側の欄をご覧下さい。Lafcadio Hearn という綴りなのですが、非常にシンボリックな事実がありまして、名は体を表すということなのではないでしょうか、「ラフカディオ」という名は生地レフカダから取られていて、レフカダには「さまよう」という意味があるそうです。また「ハーン」という名前ですが、これは中世英語の *erren* から来ていて、ラテン語の *errare* すなわち「漂泊する」という語に由来しているとのこと。Lafcadio Hearn という名前がまさしく、彼の一生をあらかじめ予言しているような、そういう名前だったわけです。1 歳の時に、父が西インド諸島（カリブ海）へと転属になったため、母と女中（お母さんがギリシャ人で英語が話せないので通訳も兼任）に付き添われて、父の生家のあるダブリン（アイルランド）に到着します。後に両親は離婚となり、お母さんは故郷のギリシャに帰ってしまう。そして大叔母に引き取られます。アンダーラインをつけておきましたが（アンダーライン部分はポイントとなることです）、ラフカディオは小さい頃から民話とか神話とか怪奇話などに異常な関心を示していたそうです。これは後の彼に結びつきます。13 歳で英国本土の学校に入る。17 歳で大叔母さんの遠縁の世話で北フランスに留学。この留学先でフランス文学に親しんでいます。このあたりからラフカディオ・ハーンらしい生涯が始まるのですが、その後 19 歳でアメリカに渡ります。ニューヨークを経てオハイオ州シンシナティに移住。これはよくエピソードとして引き合いに出されるのですが、混血黒人マッティ・フォリー（炊事に雇われていた女性）との結婚がもとで勤め先の新聞社を解雇されてしまう。当時、黒人との結婚は禁じられておりました。各種の仕事を見つけては窮乏生活を続ける中、図書館で読書にふけります。再び記者となってから、下層社会、特に黒人の風俗を好んで書いています。27 歳の時に、新たな変化を求めてルイジアナ州ニューオーリンズに移住、この地はラフカディオ・ハーンにとってなかなか重要なところでありまして、各国、各地域の文化が混血しあうこの街で 10 年間を過ごします。右側の欄 (pp. 23-24) を見て下さい。この時期の

様々な彼の活動を書きおきました。混血文化、クレオール文化に深い関心を抱き、関連記事をたくさん書いています。フランス文学、ロシア文学を紹介し、それから『異文学遺文集』（民族伝承再話集）という本を出していますね。扱われている範囲の広さが凄いのです。エジプト、エスキモー、インド、フィンランド、アラビア、ユダヤ、どの文化圏にでも関心を持ってしまふ。ですから日本で『怪談』を書いたというのも、その延長上にあるということです。さて、ニューオーリンズで万国博覧会が開催された時に日本に関心を持つようになり『古事記』を読む。当時チェンバレンという日本学者が東大の先生にいたのですが、この『古事記』はそのチェンバレンが英訳したものです。それから『クレオール俚諺集』、『クレオール料理法』も書いています。料理本まで書いてしまうのですから、クレオールにはよほど惚れ込んだのでしょう。それから『中国怪談集』も出しています。世界のあらゆる地域が、ハーンの中に溶け込んでゆくわけです。次のページにゆきますと、1887 年 37 歳の時に、西洋以外の未知の世界を求めてニューオーリンズを離れてカリブ海西インド諸島の一つ、フランス領マルチニック島に渡り、そこで 2 年間を過ごします。このマルチニックというのは、後の今日の話のポイントの一つになります。右側の欄 (p. 24) を見ますと、マルチニックの熱帯美、クレオール混血文化に魅せられた紀行文、見聞記のほか、ニューオーリンズやマルチニックに想を得た小説『チータ』、『ユーマ』を執筆していますね。この二つの作品は邦訳されています。さらにマルチニックの民話を収集しています。そしてアメリカに戻り、『西インド諸島での二年間』という本を書いたり、『チータ』や『ユーマ』を刊行したりします。何と日本に来る前に彼はこのように旅から旅を重ね、世界中のあらゆるものを吸収して、そして日本にやってくるわけです。ニューヨークの『ハーパーズ・マンズリー』誌の学芸記者として日本に派遣されて、横浜に到着するのが 1890 年です。日本においても、横浜、松江、熊本、神戸、東京、その他日本各地を旅行します。私はラフカディオ・ハーンに北海道にも来て欲しかったと思っておりまして、そうすれば、北海道の風土、アイヌの民話などに深く分け入って、きっとすばらしい本を書いてくれたでしょうから。

講演メモ (pp. 19-22) の方に戻りましょう。では、こうしたラフカディオ・ハーンの体験というのは何なのか、という方に話を進めます。「ハーンは新たな土地に行くと、必ずその土地から養分を深部から吸い込んで、その土地の人間も気づかないでいた新たな世界を創造し、そのことを通して自己もまた新しく創造していく」ということでありまして、ラフカディオ・ハーンの全体を見ますと、何よりも彼の旅の足取りが語っているように、彼の生そのものがその体现であったということが言えます。それをよく示す具体例として、関連テキストを資料 2 (pp. 25-29) として色々と揃えてみました。

実際に彼はどのように旅をしているかということで、テキスト 1、2 (p. 25) を見ていただきたいのですが、最初のものは「東洋の第一日目」と題された文です。ハーンは、1890 年の 4 月 4 日に横浜に到着しております。このテキストが発表されたのは 1891 年の 11 月ですから、若干時間は経っているのですが、読んでみて、私は、旅先の第一日

目にこんなことを旅行者が感じ取ることができるのだろうかと思嘆しました。ポイント部分にアンダーラインを引いておきましたが、先ず出だしからゆきますと、「これまで全く未知だった世界を、この目は確かに見ている。そんな当たり前の事実を十分承知しながらも、私はどこかうっとりとしていた。その日のあまりの神々しい美しさに、私の意識も尋常ではなかった」——。アンダーラインのところだけを読んでゆきますと、「それはむしろはっきりした色調というより、やさしい透明感による魅力ではないだろうか。[……] まるでなにもかも、小さな妖精の国のようだ。人も物もみんな小さく、風変わりで神秘的である」。さらにずっと下にゆきますと、到着した地である横浜の店の店員さんは法被など着ていて、そこに漢字の文字がデザイン豊かに染め抜かれているわけで、そのところに彼は注目するのです。「店員の着物にも、のれんと同じ美しい文字があらわれている。どんなに手のこんだ意匠でも、これだけの趣は出せないのではないだろうか。もちろん、装飾的な意図をもって手を加えているとはいえ、これらの表意文字には、意味のない図案では決して持ち得ない、均斉のとれた美しさが迫ってくる」と。何とまあ見事な記述でしょうか。そして彼はこう続けるのです。「表意文字が日本人の脳に作り出す印象というのは、退屈な、ただの音声記号であるアルファベットの組み合わせが西洋人の脳に作り出す印象と、同じものではない。日本人にとって、文字とは、生き生きとした絵なのである。表意文字は生きているのだ」。この表意文字と表音文字の比較というのは、文化論的に非常に重要な点でありまして、ギリシャ由来の西洋の表音文字と漢字による表意文字は別の文字体系を持っており、それを到着したその日に、もちろんある程度の知識はあらかじめあったのだろうけれども、このように記述できることが驚きです。「表意文字は生きているのだ。それらは語りかけ、訴えてくる。そして、日本の通りの空間には、このように目に呼びかけ、人のように笑ったり、顔をしかめたりする、生きた文字が溢れている」などという風に、こうしたことを異国での旅の最初に見て取ることができるものなのではないでしょうか。初めて読んだ時、私は、これはやられたと思いましたね。ハーンは並大抵の人ではないと。

もう一つ、マルチニックでの紀行文を見てみます。関連テキストの2 (pp. 25-26) です。書いているのはラファエル・コンフィアンというクレオール思想の代表的な作家ですが、「すばらしい旅人ラフカディオ・ハーン」という文を書いておりまして、読んでみますと、「熱帯の日没の実体を本当に理解した人———というか正しくは、実体を言葉に書き留めた人———はハーンが最初だ、と突然さとした日のことを私は忘れはしないだろう」と、こうコンフィアンは書き出しています。マルチニックにはプレー山（ペレー山）という山がありまして、これは1902年に火山爆発をして、当時の首都の住民3万人が死んでしまうのですが、その山についての記述です。続くアンダーライン部分に、このプレー山の日没時の様子が書かれています (p. 26)。「そのとき山頂のまわりの空が極度に澄んで輝いていることに気がついた。その後光は魅力的なグレーとピンクで——火山の両側面も穏やかなオレンジ色に包まれていた。それは私の周囲の大地や森の上に

包むように降りてきた層を成す暗闇と鋭い対照をなしていた。実際、空はまだ真昼間なのに、大地はもうほとんど熱帯の夜の神秘的な腕に包まれてしまったのである。その時、3 日前にハーンの『西インド諸島の二年間』で読んだ奇妙な文章を思い出した」、とこうあります。これは、ラフカディオ・ハーンがかつてこのプレー山の日没について書いた文章のことを言っておりまして、後段にその文の引用があります (p. 26)。「こうした熱帯では<夜>は上から暮れるような感じはしない。山頂と山頂が連なるこの土地に<夜>が降りてくる、という気はしない。夜は下から、まるで息を吐き出すかのように、大地から立ち昇る」——。このような独特の日の暮れ方を、現地の人たちも気がついていなかったのです。それをラフカディオ・ハーンは旅先で微妙にかつ鋭くキャッチする。凄いですね。さらにこう続きます。「しかしそれでもその高地の頂上は、島の残りが暗闇のとばりで包まれ星が出始めた後もなお数分の間、その先端で火山のごとく輝き続ける」。つまり周りは全部暗くなって暗闇に包まれてしまうのだけれども、そのプレー山の頂だけはしばらくの間、明るさで包まれているということを適確に記しているわけです。ラファエル・コンフィアンはある日、実際にそのことに気がついて、ラフカディオ・ハーンのこの文書を思い出したのです。ですので、現地の人にも気づかないことをラフカディオ・ハーンは気づく。先ほどのテキストについて言えば、我々は表意文字というものをラフカディオ・ハーンが書いたように普段見ていない。ラフカディオ・ハーン的眼光は実にシャープで非凡です。さらにコンフィアンはこう続けます。「ラフカディオ・ハーンは私たちに古くから伝わる黒人霊能師 quimboiseur の秘密の世界の一つに入り込むことに成功した」と。少し飛んで別のアンダーラインのところにはこう書かれています (p. 26)。「この霊はキリスト教徒の霊のように空に住んではない、そうではなくて昼間はフロマジエ (パンヤの樹) などの御神木の高い枝や梢に眠っている。しかし太陽の最後の光線が輝き始めると、こうした霊たちはたちまちのうちに人々や家や動物や野原を呑み込み暗闇の中にさまよい出る。ハーンはそうしたものの存在を直感した」。ですから、日本にハーンが来て、非常に精神的に豊かなところだと彼が感じたのは、日本の地に宿る様々な精霊を彼はすぐに感知したということとして、マルチニクにおいても同じように彼は精霊をこのように鋭く感知していたということなのです。しかも現地の人の気づかない、風景の中の独特の秘密も見抜いてしまう、そういう眼力を持った人なわけです。

講演メモ (p. 19) の方に戻りますけれども、こうした独特の体験をラフカディオ・ハーンの体験と呼ぶとすれば、その特性として、以下の三つの点が言えるのではないだろうかと思います。一つ目はこうです。ラフカディオ・ハーン的眼は異国の表面をなぞる目ではない。心身もろともその土地の生の深部に入り込んでゆく。その土地を一気に内部から受容しつつ、しかし実はその土地の内部へと受容される。私はこの「受容される」という点に注目をしたいと思います。同化しつつ、つまり外の風景、文化を同化して自分の中に取り入れるのだけれども、それと同時にその土地の風土、精霊というものに同

化されてしまうという、そういう独特の感性を持った人であるわけです。ここに一つ書いておきましたけれども、ドイツの詩人ノヴァーリスに「能動性とは受け入れる能力である」という言葉があります。つまり「受け入れる、外からのものに領有されてしまう」ということは一見受身的なようだけれども、実はそれこそが能動性なのだというわけです。若干逆説的な表現なのですが、ハーンはまさしくノヴァーリスがそう語る能力を持った人なのですね。こうした場合、人は、そういう人を特別視して、普通の人と違うからね、と思ってしまうことがよくあるのですが、そのような際、私はいつもこう言うようにしています。そういう凄い人は別に特別の人なのではなく、彼らは我々の代表者なのだ。つまり我々は、そういうような能力そうした感受性をどこかに眠らせてしまっていて、彼らは我々の代わりとなって、代表として思考し感受してくれているのです。そうでなければ、単に芸術家を崇めるだけで終わってしまいますので、私は、彼らは我々の代表者であると考えるべきでないか、そのように思っております。

それが一つ目だとしますと、二つ目としては、ラフカディオ・ハーンは、その地の「土地の精」を直感し、それと共鳴し、交感し、心身ともにそれと交わる、という点を挙げたいと思います。「交わる」ということについては、これは単にメンタルにではなく、「官能的に交わる」という内容まで含んでいいと思います。土地の精というものについては後で話をしますが、例えば、ああ美しい花だなと思った時、普通は私たちがその美しさにふと気がつくという風に考えられているのですが、自然と一体化したアニミスティックな見方に変えて言えば、それは、花がそういう感受性を持った人に呼びかけているのだ、という風にも見ることはできるのではないのでしょうか。つまり花が美しいと思う時、それは花が呼んでいるのだ。言い換えれば、その人は花のそうした気配を呼び込んでいるのです。そういう感覚能力こそ旅においても、人生においても非常に重要なのであって、ラフカディオ・ハーンはそういう能力に非常に恵まれていたように思います。この「土地の精」でありますけれども、その土地の魂、霊、生命の源であり、そのこの生の根源に宿る霊的な力のことです。英語で言えばGenius of place、フランス語ではGénie du lieuという風に、ヨーロッパでもこういう言葉があるし、当然、世界各地でその土地その土地にこの「土地の精」があるわけです。ですから、「地域振興」といった場合にも、単に表面的に賑やかにすればいいのではなく、それが持続してゆくためには、その土地が長い時間をかけて培ってきたその「土地の精」にまで下りてゆく必要があるだろうということです。実はこの言葉は古く、古代ローマにおいては土地の守護神をラテン語でGenius loci（ゲニウス・ロキ）と呼んでいました。元来どこにもその土地独自の「土地の精」が宿っているということであって、機械文明が進展するに従ってどんどん地上から追われてゆきました。ラフカディオ・ハーンが、マルチニクとか日本に来た時は、そのちょうど移り変わりの時期です。

さて、三つ目に挙げられるのが、こうした体験を可能にする、世界各地の「文化の万華鏡」としてのラフカディオ・ハーンのクレオール的身体です。先ほど彼の生涯を見ま

したように、彼の中にあらゆる文化が万華鏡のように息づいています。このような感性・身体性があったからこそ、その土地その土地に行った時、その「土地の精」を感知し、それと交わり、それを同化しつつ同化されるという独特のハーン的な世界が広がっているわけです。これについては関連テキストの3 (pp. 26-27) をごらん下さい。最近ハリケーンのカトリーナが襲来して大打撃を受けたのですが、人種の交差路の街アメリカ南部のニューオーリンズについて記述したラフカディオ・ハーンの記事です。「百年以上にわたって、ニューオーリンズは放浪の魂を世界の果てからこの地に引き寄せて来た。この歩道を歩いた者の中には、インドや日本で生まれた人がいた。中国人や色黒のマニラ生まれの人もいた。西インドの島々や南アメリカ出身の人もいた。回教主（サルタン）の臣下もイオニア海の船乗りも、ここに家郷を求めて来たのだった。あらゆる文明国がさすらいの子らをここへ送った。北、東、西の諸国のあらゆる町が、神秘的で甘美で誰をも捉える魔力を持った、この遠い南の町へ、安らぎを知らぬ魂を委ねたのだ」。ハーンは文化が混淆し合うこのニューオーリンズがとても気に入ったらしく、ここで10年間暮らします。このニューオーリンズの街を出口として、さらにマルチニックに行ったわけです。

講演メモ (pp. 19-22) の方に戻りますけれども、以上までが前半でありまして、これらをもう一つ掘り下げて、ハーンのマルチニックでの体験と日本での体験を重ね合わせながら見てゆくことにしたいと思います。実は彼のマルチニックでの体験は後に日本文化の基層の探求者となるラフカディオ・ハーンの母体となっています。ですから、マルチニックと日本というのは非常に離れているように思いますが、歴史というのは色々な流れ方をしているのでありまして、「土地の精」という補助線を引いてみるならば、19世紀におけるマルチニックの西インド諸島と日本は、「土地の精」が豊穡に宿る世界有数の地としてつながっており、ハーンは、この二つの地域の「土地の精」に引かれて、マルチニックを訪れ、そして日本にやってきたのだと思います。さて先ずマルチニックの地理的確認をします。[地図を示しながら] カリブ海の地図です。ここがフロリダ半島、これがキューバ。アンティール諸島は、大アンティール、小アンティールからなっていて、群島が非常に美しい弓の形になって連なり、南米大陸（ベネズエラ）につながってゆきます。ここにマルチニックがあります。後でまた話をしますが、この美しい島の連なり、このきれいなカーブ、これを頭に留めておいて下さい。北アメリカと南アメリカがこれらの群島を通してつながっているという、そういう位置関係です。さて、このマルチニックなのですが、面積は沖縄本島ほどで、人口約40万、首都はフォール・ド・フランスです。1902年に島のプレー山が爆発し、当時の首都サン・ピエールは埋没して3万の死者が出ました。では、実際にはどんな島なのか、マルチニックの写真をガイドブックで見てください。これは市場です。そして街角の風景です。若い男が通りがかりの娘に声をかけています。それから、これはマルチニックの女子高生たちです。はじけるくらいに元気です。それからマルチニック風のコロニアルな家。エキ

ゾチックな感じがしますね。これは市役所。フランス国旗の三色旗が立っていて、風景から見るとまるでフランスではないのだけれども、ああ、ここはフランスの領土なんだということが分かります。これは奥地の風景です。実はこの島はうっそうとした樹木で覆われていまして、あそこに見えるのがプレー山です。これは山道をおじさんがロバに乗ってゆったり進んでゆくところ。これは豪快に落ちている滝。それから、いかにも熱帯風の植物、生き物たち。このように非常に美しい。これが浜辺です。樹木がすごく高いです。自然に恵まれた非常に豊かなところで、フランスが手離したくないというのがよく分かります。これはカリブの女性たちですけれども、混血ですので非常に美しい人が多く、つい立ち止まって見てしまうことがよくあります。混血でありクレオールです。これを見て下さい。このようにうっそうとした山が広がっています。靈気が漂うような世界です。実は私は数年前に2週間ほどここに滞在したことがあるのですが、その時の写真も見てみます。これは友人となった画家のアトリエで、山の中にあるのです。アトリエと言っても、我々が普通に意識をするアトリエとは全く違って、自然の中の山小屋のような感じです。ハンモックが見えますが、あそこで眠っているのは実は私です。なぜこのような島に行ったのか言いますと、別にラフカディオ・ハーンのためではなくて、この写真を見て下さい、この右側にいるのは私なのですが、ここにいるおじいちゃん、この人が大変に有名なエメ・セゼールという詩人です。この時90歳ぐらいなのですが、マルチニック島出身で、20世紀を代表する詩人のひとりとなっています。この詩人のことを調べるために私はマルチニックに行きまして、ここにいる画家のセルジュ（先ほどのアトリエの所有者で、札幌にいるフランス人の友人が紹介してくれました）が、こうしてセゼールと面会する機会をつくってくれました。さて、これは植物園です。中央に写っているのが私ですが、ご覧のように熱帯の樹木が生い茂っていて見飽きないところです。あと一つ、実際にラフカディオ・ハーンが撮っている写真をお見せしたいと思います。彼はなかなかのカメラマンでして、この写真は、顔ははっきり見えないのですが頭の上に物を載せて運ぶマルチニックの若い女性です。建物の壁の感じも面白いし、この写真から、ラフカディオ・ハーンはかなりのカメラマンだということが分かります。それからこれは当時の海岸の風景です。さて、また混血の女性が出てきました。ユニークな衣装を身に着けた混血美人たちです。このようにマルチニックは非常に興味深いところです。歴史を確認しておきますと、17世紀にフランス領となります。悲劇的なのは、イギリス、フランス、スペインの攻撃によって先住民が全滅してしまうことです。この全滅ということにご注意下さい。その結果、プランテーションの奴隷労働者として、最初はアフリカ大陸から、後にインド、中国など各地から移住してきて、一大混血が進みました。こうした歴史的・文化的背景が文化の異種混濁を掲げる近年のクレオール思想の母胎となっており、現代思想、現在の文化論に多大な影響を与えています。言語はフランス語およびフランス語系のクレオール語です。

ハーンの日本での体験は、このマルチニックでの体験が母胎となっています。日本へ

の移住は、このマルチニックの滞在の延長上にあるということです。これについての記述が、関連テキストの 4 (p. 27) です。これは平川祐弘氏のこのタイトルの本の中に収められていまして、実はゴーガンがちょうどこの時マルチニックに寄っているのです。知り合いになったわけではないのですが、ちょうど同じ時期に彼ら 2 人はいたわけですから。そのことについて平川氏はこう書いています。「ゴーガンにとってプレー山 [まだ爆発する以前のプレー山です] を描くことはジャポニズムと同一の芸術運動に属する行為だった。その証拠にプレー山の一連のスケッチは日本の扇子の形をした中に描かれている。実はゴーガンとハーンは、同じ時期に同じサン・ピエールの街で、数百メートル離れた場所に住んでいた。そしてハーンは来日以前だったが、プレー山を眺めてこんなことを呟いた。それはさながらプレー山をスケッチするゴーガンをふと見かけでもしたような、そんな感想である」——。そのハーンの言葉を見てみましょう。こう書かれています。

「時々、プレー山を眺めているとく富嶽百景>を描いたあの偉大な日本の絵師と似た仕事を誰かクレオールがやってくれないか、などと私は思った。あの日本人の絵師と同じくらいに生まれ故郷の丘や山に愛着と誇りがあり、平野の熱気も蛇も怖れないような人」——。ということで、後にもう日本に行くことを予告しているような、そのようなハーンの記述です。そして現に彼は日本にやって来るわけです。

ではそのマルチニックと日本と共通の基盤とは何なのか、ということをもとめてみますと、まずは先ほど述べた「土地の精」ということでして、関連テキストの 5、6、7 (pp. 27-28) には、ハーンがマルチニックと日本に見て取ったものの共通点が明確に出ています。テキストの 5 ですが、ハーンは、怪談とか幽霊とかそういう不思議な話を色々書いたのだけれども、「マルチニックは魑魅魍魎が住む島である」と書いていますね。ラフカディオ・ハーンはこの島に非常に興味を持っていて、マルチニックの民話をたくさん収集しています。後に日本で民話や怪奇話を収集して本を書いたのと同様です。テキスト 6 (p. 28) にゆきますが、それと結びついた内容のことを「東洋の第一日目」で彼は言っております。読んでみますと、「私は、神道の象徴である鳥居の前に立っている。これまで絵でしか見たことのなかった鳥居を、初めて見たのである。写真や版画でさえ一度も鳥居を目にしたことのない人に、どう説明すればいいだろう」。とこう語りつつ、非常に見事な言葉でこう書いております。「壮大な鳥居を初めて見た人は、もしかしたら、空に向かってそびえ立つ、美しい漢字の巨大な模型を見た、と想像するかもしれない」——。何と透視力豊かな感性でしょうか。「鳥居の持つすべての線に、生き生きとした表意文字の品格があり、書の大家が四回筆を揮って書いたような、大胆な角度と曲線を感じさせるからである」。鳥居の形を、書道の筆の動きに例えて言っているところが凄いですね。それから表意文字というのが出てきます。つまりは、日本の神道が精霊の世界であることを、彼はずばりと見抜いているわけです。西田幾多郎という有名な哲学者がいますが、この人がラフカディオ・ハーンについて書いていまして、見てみますと (テキスト 7: p. 28)、「ヘルン氏 [ハーンのこと] は万象の背後に心靈の活動

を見るといふ様な一種深い神秘思想を抱いた文学者であった。かれは我々の単純なる感覚や感情の奥に過去幾千年来の生の脈搏を感じたのみならず、肉体的表情の一々の上にも先祖以来幾世の霊の活動を見た。[……] 我々の肉体は無限の過去から現世に連なるはてしなき心靈の柱のこなたの一端に過ぎない、この肉体は無限なる心靈の群衆の物質的漂徴である」。こういうわけです。西田幾多郎は、ハーンのこのような「万象の背後に心靈の活動を見る」という立場を「物活論」と呼んでいました。マルチニックでみた精霊の世界を日本でも、それももっと濃密に感じたということになります。

さらにもう一つ加えますと、「一神教的世界に変わる生のあり方」というのをマルチニックにも日本にも見出したことが挙げられます。この一神教的世界というのは西洋近代世界なのですが、神すなわち創造主があり、人間と自然は神が創り賜うた被創造物であって、この人間が「主体」としてその自然に働きかけ、人間が自然を変えていくという世界像です。自然を人間が支配し、神がその全体を統べるというわけで、超越的主体が世界を司っているという世界観です。マルチニックあるいは日本そして多くの非西洋世界では——ここがポイントだと思うのですが——生命（人間、生きもの、万物）は宇宙的流動的な実体であり、その全体を自然と呼びます。全体が一つにつながっている、すべてがつながっている。それをつなげているのが霊、すなわち「世界の、宇宙の精」であるわけです。ラフカディオ・ハーンは小さい時からギリシャ神話を母に聞かせてもらって親しんでいましたし、その後長じて、世界中の民間伝承、マルチニックの民話、日本の怪異譚や神道的世界（アニミズム）を深く探求したのも、実はラフカディオ・ハーンは自身が生きてきた一神教的世界から脱出したかったからであって、その脱出行が彼の旅行であったように思います。そうした意味では、ハーンは西洋的世界基準に代わる別の基準の提出者であると言えるわけで、別様に言えば、現在のグローバリゼーションの先験的な批判者であったわけです。そのためでしょう、ラフカディオ・ハーンは、キリスト教徒ではなく仏教徒として埋葬されています。

さらにもう一つ、私がつけ加えたいのは、文化における異種混淆、クレオール性ということです。マルチニックはクレオールの典型的な例ということですが、日本もそういう風にして見た方が有益なのではないかということとして、ハーンは確かに当時の日本の西洋化を批判しているとはいえ、我々としては、中国、東洋文化圏とアニミズム的世界との習合・交雑文化であった日本が、さらにこの西洋という世界と交配しクレオール化していったという風にとらえた方が生産的ではないかということです。日本は近代における「文化の異種混淆」の世界的な舞台なのであって、「極東にして極西」、すなわち東西の文化の万華鏡を生きてきたはずなのです。ここに日本の文化資源、観光資源を考える上の重要なポイントがあるのではないかと思います。マルチニックと日本はこのようにクレオール性において世界史的な文脈として実はつながっています。コロンブスの航海を思い出して下さい。コロンブスは、インドをめざし、その向こうあるジパングを求めて、西インド諸島に到着したのです。西インド諸島とジパングは文明史的にはこ

ういう見えない糸でつながっているわけです。ラフカディオ・ハーンがマルチニックの後に日本にやって来たというのは、こういう点を考えると、どこか必然の足取りであったような気が私はするのです。

そろそろまとめに入りたいと思いますが、以上見てきましたように、ラフカディオ・ハーンは、「間を生きる人」、「間をつなぐ人」であるということが言えます。「人間」という言葉には「間」という言葉が入っていますが、その意味で彼はまさしく「人間」、「間を生きる人」であったわけです。ハーンの世界観を定式化して言えば、文化Aと文化Bの「間を生きる」ことによって、AでもなくBでもなく、双方を内包しつつ、かつそれらとは別のCを生み出すということです。彼の中ではそれが「創造」として考えられているはずですが、重要な点を確認しておきたいと思いますが、こうした創造は、AとBとが単に混ざり合うということではありません。クレオール思想の代表であるグリッサンによれば、混ざり合うこと、すなわち混血とクレオールとは別のものであって、クレオールとは、AとBとの接触から、双方とは異なった新しい価値が生み出されることです。換言すれば、それは「混合」ではなく「化合」なのです。つまり足し算ではなく掛け算であります。このように文化相互を掛け合わせて別の価値を生み出すこと、これがラフカディオ・ハーンにおける創造の一番の秘密ではないかと思います。彼の生涯が何よりもその雄弁な表現であったし、それを可能にしたのが彼の旅でした。さらにつけ加えれば、ハーンの文学作品は、題材は日本である一方、英語で書かれていることによって、仕上がりは西洋です。西洋でもなく東洋でもなく、かつその双方であるわけです。文化Aと文化Bを掛け合わせて、そのどちらでもなく、かつその両方を含むCを創り出しています。それと関連した例を挙げますと、彼の外国語観にもこうした考えが表われています。東大の日本語日本文学の研究者であるチェンバレンに宛てた書簡の中で、ハーンは「外国語の使用は[……]、[二つの文化の]境界と重なり合い、——まだ未知の広がりをもつ漠然とした領域へとあふれて流れてゆくのです」と書いています。つまり「外国語の使用」は、言語Aでも言語Bでもない「二つの文化が重なり合う、まだ未知の広がり」すなわちCにつながってゆくということなのです。そうした可能性を持つことが実は外国語の使用ではないかというのが彼の考え方で、ここには実に含蓄深いものが含まれています。また、ハーンは後に東大の英文科講師となるのですが、東大での講義録に「偉大な文学は、二つの異なった民族の結婚から生まれる」という有名な言葉があります。この言葉にもこれまで述べてきたハーンの世界観が明確に表われているように思われます。このように、「創造」において本質をなすのは、「外部」の関与です。ハーンという外部者のおかげで、我々はどれだけ豊かに我々自身を知ることができるようになったことでしょうか。私自身もハーンの眼を通して、日本のことを、どれだけたくさん知ったことでしょうか。つまり外部の関与、外部の眼が人を創り直してくれるわけなのです。一方、ラフカディオ・ハーンは、どの異国の文化にも深く関心を抱くとともに、その向こうに、それぞれの文化相互を全体的につないでいる根源的なものを信じて

いました。それを示すのが最後のテキストの 8 (pp. 28-29) です。静岡の焼津の沖を泳いだ時の彼の記述です。何気ない静岡の夜の海、そこを精霊流しの燈籠とともに泳いでいる時に、小さい頃の自分が経験した海、そしてかつて滞在した世界の様々な土地の海、それらと共通なものを、彼は海の向こうから聴き取ったと書いています。この文章の最後のところを読みます。「海の様々な発言に合わせて、魂の経験という、より広大な海に動いている、太古からの恐怖のあらゆる波がこたえざるをえないのである」。これは、「すべてはつながっている」という生命の時空的な一体性、宇宙性の体験だったのでしょう。実に深い感受性を持った人であると思います。

以上、ラフカディオ・ハーンについて話してきましたけれども、最後に北海道との関連で少し述べておきたいと思います。ラフカディオ・ハーンを観光創造論的にとらえ返すならば、どういうことが導き出せるだろうかということです。一つ目は、人はその「土地の精」を求めて、その「土地の精」に惹かれて、その土地を訪れるということです。ラフカディオ・ハーンはまさにその体现者であると言えます。この「土地の精」というのは、広い意味で考えるならば、その土地の自然、風土、風景、生活、食、文化を生み出している根源の力、その精髓、エッセンス、魂のことです。過去に形成され、現在も生きており、将来においても意識されてゆく、そういうものとしてとらえたいと思います。観光において地域振興を考えるベースにも、こうした考えが必ずや込められていなければならないと思います。最近出た本で、岡村民夫氏の『イーハトーブ温泉学』という本がありますが、これは、宮沢賢治が花巻に眠る「土地の精」すなわち温泉を、まさしく地の精（大地の巨大なエネルギー）と人間との交流の場として、パブリックスペース化、リゾート郷化しようと試みていたことを書いたものです。それは今日から見て実に先見的な試みでした。そしてもう一つつけ加えたいと思います。先ほど外部の眼の重要性を指摘しましたように、この「土地の精」は「外からの者」によって目覚め、共有され、再創造されるということです。

こうした点を北海道との関連で言うならば、私はここに住んで 30 年経つのですけれども、非常に魅力的なところだと思っています。北海道は「土地の精」の宝庫です。おそらくそれは三層からなっていて、まずは基層としてアイヌの生活文化があります。アイヌこそは北海道の「土地の精」の原創造者です。それから開拓時代。「フロンティアの開拓」のもとで、日本と西洋とのクレオール的な異種混雑が進みました。これを新しい層としましょう。そして私としては、さらにもう一つ、もう少し大きなスケールで、世界の中における北海道の地政学的位置という点から考えてみたいと思います。すなわち、先ほどマルチニック含む西インド諸島が非常に美しい弧となって連なっていることを話しました。日本全体を、つまり北海道、本州、四国、九州をもう少し南北に広い目で見ると、それは、サハリン（そして千島列島）からずっとつながってきて、九州から沖縄へと続き、台湾に連なり、全体は西インド諸島と同じような美しい弧となって、東南アジアにつながっていることが分かります。すなわち、日本はユーラシア東部に存在

する長大な列島の中に位置しているということです。このことは日本の地政学的位置として非常に重要な点で、本来はこうした地政学的な観点から日本のあり方を考えるべきなのですが、それはまた別の機会に譲るとして、こうした列島の弧において、北海道はその北寄りにあります。つまり、地政学的位置から言えば、北海道は、ロシア北東ユーラシアと東南アジアをつなぐ橋になる位置を占めているのです。北海道はサハリンを介して、北東ユーラシアにつながっている。「北の大地」と言うけれども、それは本州から見ただけの話であって、ロシアから見ると南の温暖な地です。緯度的にもそうです。「北の都」札幌と言われていますが、ヨーロッパに持っていきますと南フランスの位置です。パリは何とサハリンと同じほどの北にあります。かつてオホーツク文化が10世紀頃まであったということですが、北海道をこうしたユーラシア北東部の広がりの中で見れば、この圏独自の「土地の精」がさらに豊富に豊穡に見出せるはずで、サハリンとユーラシア大陸の間は間宮海峡（タタール海峡）と呼ばれておりますが、この海峡は非常に狭く数キロほどです。実はソ連の時代にこの海峡をトンネルでつなごうというプロジェクトがありました。プーチンの時代にも、そういうプロジェクトがあったとのこと。要するにユーラシアとサハリンをトンネルで結ぶことは難しくはない。そしてサハリンと北海道の間に宗谷海峡があります。宗谷海峡の距離は、青函トンネルが通っている津軽海峡と大体同じです。つまりはサハリンを経由して北海道とロシアをトンネルでつなぐことはその気になればできるわけです。とは言っても、日本とロシアとの今の状況では、政治的にも経済的にもかつ軍事的にも実に難しい話なのではありますけれども、ある一つの展望というか、将来的な考え方として、このトンネルの話には、私は非常に興味があるのです。講演メモ（p. 21）のところに、「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた」という一行詩を載せておきましたが、これは安西冬衛という大正昭和の詩人のもので、彼は満州、大連に渡りまして、この詩を書いたのは1929年です。日本の歴史を考えてみますと、大陸とどうつながるかということが根幹にあり、それは漢字文化圏として形成されてゆく時代から近年の太平洋戦争まで、そして今後も、この国の基本的な位置構えとして実に大事なテーマであると思います。そうした意味で、「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた」というこの詩は、大陸に渡った安西冬衛という一詩人の心象スケッチを越えて、あえて言うならば、日本の置かれている地理全体の、日本の歴史全体の、日本の文化全体の、日本のあり方全体についての、何やら実に味わい深いシンボリックなイメージを喚起しているように思われるのです。この「てふてふ」（蝶々）ですが何色にイメージされますか。白と思う人が多いかもしれませんね。私は黄色でとらえたいと思っていますが。

さて、以上述べた3つの層が重層的に融合すれば、この北海道独自の「土地の精」とその「文明の磁力」（これは石森先生の言葉ですが）に牽引されて、道外から、そして中国、台湾、韓国、ロシア、欧米など海外から、人々はきっと北海道にやってくるはずで、そうした新たな試みとして一つ紹介しておきたいのは、昨年創刊された雑

誌『カイ』です。編集者の一人でカメラマンの露口啓二さんという人がいるのですが、この方は北海道の「土地の精」の探求者であると思いました。この方は北海道の地名に注目して——北海道の地名こそアイヌが源流ですね、札幌という言葉もそうです。アイヌの言葉に漢字をあてていったのですが、そうした地名を通して、かつての「精」がひっそりと生き続けているわけで、こうしたクレオール性もなかなか興味深いと思います——我々の生きているこの北海道の文化の重層性を探っておられます。

最後になりますけれども、我々の専攻名に冠されている「観光創造」の「創造」という言葉、この「創造 creativity」こそ、21 世紀のキーワードです。「観光創造」とか「創造都市」とかという風に語られるように、この「創造」という言葉を通して、どの分野においても従来までの枠組みの組み換えが求められています。私はよく言うのですが、これは、恐竜の時代から哺乳類の時代が変わる、そういうことを示しているように思います。重厚長大のものから、知恵と豊かな感性を持った新種の生き物が現れてくる、そういう変化の時代です。「観光創造」も、おそらくこのことと共鳴しているはずです。先に述べましたように、創造というのは、異なったものの相互の結合です。しかも「混合」ではなく「化合」です。それまでまったく関係なかったものをつないで新たな構造をつくること、環境を一気に模様替えをして、再起動させること。私は 20 世紀の芸術を専門にしてきたのですが、創造の基本原理とは、20 世紀の詩・アートの創造原理がそうであったように、異なったもの同士をつなぐことに存しています。それは文化論においても成り立つわけですし、ラフカディオ・ハーンの旅は、そうした今日的な創造を、先駆的に、生き方そのものを通して体現したものであった、というのが私の結論です。ご静聴どうもありがとうございました。

◆添付資料◆

※当日配布された資料を、本叢書用に整形・再録

講演メモ：	ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造	
	——観光創造を考えるためのひとつの原石として	
		……19-22
資料 1：	日本到着までのラフカディオ・ハーンの旅（移動）の足取り	
		……23-24
資料 2：	関連テキスト	
		……25-29

2009 観光創造フォーラム(09/02/27) 講演メモ
 大平 具彦

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造

——観光創造を考えるためのひとつの原石として

1. なぜラフカディオ・ハーンなのか——問題設定

- ・日本に帰化して小泉八雲となり、『怪談』をはじめ日本の文化地層の深き理解者として知られるラフカディオ・ハーン、しかし(日本到着するまで、そして到着後も)彼は、実は、旅人の中の旅人。
- ・後に見るように、LH(以下、ラフカディオ・ハーンを場合に応じ LH と表記)の内部では、旅先で吸収した世界中の文化地層が渾然となって渦巻いている→今日のクレオール思想(一神教的な単一原理に代わる<文化の異種混濁>の思想)の先駆的体现者。西洋的世界基準とは別の基準の提出者。
- ・そして彼は(日本においてもそうであったように)旅先で、必ず、新たな世界を創造し、それまでとは異なる自己を新たに創造している。この「ラフカディオ・ハーンの体験」とはいかなる体験なのか。
- ・よって、この LH 的体験には、観光創造を考えるための「原石」が豊かに眠っているのではないか。

2. 永遠の旅人ラフカディオ・ハーン、その旅の足取り

→ [資料1](#) 参照

3. ラフカディオ・ハーンの体験とは

- ・LH は、新たな土地に行くと、必ずその土地から養分を深部から吸い込んで、その土地の人間も気づかないでいた新たな世界を創造し、そのことを通して、自己をもまた新しく再創造してゆく。
 - ←何よりも、彼の「旅の足取り」が語っているように、彼の生そのものがその体现であった。
 - ←具体的例として: [資料2](#) 「関連テキスト」(1)、(2)参照
- ・こうした独特の体験を「ラフカディオ・ハーンの体験」と呼ぶとすれば、その特性とは——
 - 1) LH の眼は異国の表面をなぞる眼ではない。心身もろともその土地の生の深部に入り込んでゆく。
 - (その土地を)一気に内部から受容しつつ、しかし実は(その土地の)内部へと受容される。
 - ←同化しつつ、かつ同化されてしまうメンタリティー、感性
 - cf.「能動性とは受け容れる[=他者に領有される]能力である」(ドイツの詩人ノヴァーリスの言葉)
 - 2) LH はその地の「土地の精」を直感し、それと共鳴し、交感し、(心身ともに)それと交わる。
 - ←「土地の精」:その土地の魂、霊、生命の源。その生の根源に宿る霊的な力。(Genius of place [英]、Génie du lieu[仏] ←Genius loci ^{ゲニウス ロキ} [ラテン語、古代ローマにおける土地の守護神])
 - 3) こうした体験を可能にする、世界各地の「文化の万華鏡」としての LH のクレオールの身体。
 - [資料2](#) 「関連テキスト」(3)
- では、これをもうひとつ掘り下げて、LH のマルチニックでの体験と日本での体験を重ね合わせながら、見てゆくことにする。実は彼のマルチニックでの体験は、後に日本文化の基層の探求者となるラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の母胎となっている。(←19 世紀におけるマルチニック[西イ

講演メモ

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

インド諸島」と日本:「土地の精」が豊饒に宿る世界有数の地としてつながっている。)

4. ラフカディオ・ハーンとマルチニック／ラフカディオ・ハーンと日本

・マルチニックについて

- カリブ海西インド諸島にあるフランス領海外県、面積は沖縄本島ほど、人口約40万。首都フォール・ド・フランス（1902年、島のペレー[プレー]山が爆発、当時の首都サン・ピエールは埋没、死者3万）。
- 地理的確認、現地の写真、LHの撮った写真
- 17世紀にフランス領。英、仏、西の攻撃で先住民は全滅、白人(フランス人)の経営するプランテーションの奴隷労働者として最初はアフリカから大量に移送され、後にインド、中国など各地から移住、一大混血が進んだ。こうした歴史的文化的背景は、文化の＜異種混血＞を掲げる近年のクレオール思想の母胎となっており、現代思想、現在の文化論に多大な影響を与えている。なお言語はフランス語、(フランス語系)クレオール語。(cf.大平「仏領海外県マルチニック&ブラジル出張報告記」([2003年夏に研究出張で1週間滞在]、『国際広報メディアジャーナル』No2、2004)

・LHのマルチニックでの体験は、彼の日本での体験の母胎

→資料2「関連テキスト」(4)参照

では、LHがマルチニックと日本に見て取った共通の基盤とは何なのか。

1)「土地の精」

→資料2「関連テキスト」(5)(6)(7)参照

2)一神教的世界に代わる生のあり方

一神教的世界(西洋近代世界):神(創造主)＞人間(近代的主体)／自然

←自然を人間が支配し、神がその全体を統べる(支配する):「超越的主体」が世界を司る

マルチニック、日本(非西洋世界):生命(人間、生きもの、万物)＝宇宙的流動的な実体＝自然

←「すべてはつながっている」:それをつなげているのが「霊」、すなわち「世界の、宇宙の精」

←LHがギリシャ神話(←母の世界)をはじめ、世界の民間伝承、マルチニック民話、日本の怪異譚や神道的世界(アニミズム、万物に精霊が宿る)を深く探究したのはそのため。

LH:一神教世界からの脱出者、その脱出行が彼の旅行、西洋的世界基準にかわる別の基準の提出者。(←現在のグローバリゼーションの先駆的な批判者)

(そして、さらに、もう一点加えていいのではないか、すなわち――)

3)文化における異種混血性、クレオール性

-確かに、LHは当時の日本の西洋化を批判。しかし、われわれとしては、これを、中国(東洋)文化圏とアニミズム的世界との習合・^{ハイブリッド}雑種文化(＝クレオール)であった日本の、さらなるクレオール化と考える方が生産的ではないか。

-日本は近代における文化の異種混血＞の世界的な舞台:「極東にして極西」、日本こそ東西の文化の万華鏡

→こうしてマルチニックと日本は世界史的な文脈として実はつながっている ←cf.コロンブス:インド、ジパングを求めて西インド諸島に到着

- ・LH:「間を生きる人」、「間をつなぐ人」(←人間)
 - LH の文化観:文化 A、文化 B の間を生きることによって、A でもなく B でもなく、双方を内包しつつ、
かつそれらとは別の C を生み出すことが創造。(単なる「混合」でなく「化合」)
 - ←彼の生涯が何よりもその雄弁な体现。それを可能にしたのが彼の旅。さらにつけ加えれば、
 - *LH の文学作品:題材は日本、仕上がりは西洋(英語)→西洋でもなく東洋でもなく、かつその双方
 - *LH の外国語観:「外国語の使用は[……]、[二つの文化の]境界と重なり合い、——まだ未知の広
がりをもつ漠然とした領域へとあふれて流れてゆくのです」(チェンバレン宛て書簡)。
 - *東大での LH の講義:「偉大な文学は、二つの異なった民族の結婚から生まれる。」
 - ←このように「創造」における「外部」の関与の本質的重要性。LH という「外部者」のおかげで、われわれはどれだけ豊かに、われわれ自身を知ることができるようになったことか。
- 一方 LH は、それぞれの文化相互の間を全体的につなげている根源的なものを信じていた。
 - 資料2「関連テキスト」(8)参照
 - 「すべてはつながっている」←生命の時空的な一体性、宇宙性

5. 北海道との関連で

- ・LH を観光創造論的に捉え返すならば——
 - 人はその「土地の精」を求めて、その「土地の精」に惹かれて、その土地を訪れる。
 - 「土地の精」とは、広い意味で言えば、その土地の自然、風土、風景、生活、食、文化を生み出している根源の力(精髓、エッセンス、魂)。
 - [最近の岡村民夫『イーハトーブ温泉学』—宮澤賢治:花巻に眠る「土地の精」(温泉＝地の精、大地の巨大エネルギーと人との交流の場)のパブリックスペース化、リゾート郷化。今日から見て先見的試み]
 - そしてその「土地の精」は、「外からの者」によって目覚め、共有され、再創造される(←クレオール)。
- ・北海道は「土地の精」の宝庫
それは三層からなるだろう。
 - 1) アイヌの生活文化: アイヌこそは北海道の「土地の精」の原創造者。(基層)
 - 2) 開拓時代: 北海道「フロンティア」のもとでの 日本と西洋との異種混交。(新層)
 - 3) 北海道の地政学的位置: ロシア・北東ユーラシアと東南アジアとをつなぐ橋。(将来層)
 - ←日本列島:サハリンから台湾に至るまでの 美しい弧の群島 (cf.マルチニク:北米・中米と南米をつなぐ美しい弧アンチール群島にある)、北海道はサハリンを介して北東ユーラシアにつながる (cf.沖縄:台湾を介して東南アジアとつながる)。
 - 北海道をこうした広がりの中で見れば、この圏独自の「土地の精」がさらに豊富に見出せるはず。
 - ←「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行つた」(安西冬衛)
- *この三層が重層的に融合すれば、この北海道独自の「土地の精」とその「文明の磁力」(←石森)に牽引されて、道外から、海外から(中国、台湾、韓国、ロシア、欧米から)、人々はきっと北海道にやってくるはず。
- *新しい試み:昨年創刊された雑誌『カイ』(KAI)、その編集者の一人、写真家、露口啓二:アイヌの「土地の精」の探求者(←北海道の「地名」に着目。北海道の地名こそアイヌが源流)。

講演メモ

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

・観光創造／創造

- 「創造 creativity」こそ 21 世紀のキーワード:「観光創造」、「創造都市」、——どの分野においても従来までの枠組みの組み換えが求められている。←「恐竜の時代から哺乳類の時代へ」
- 創造:異なったもの相互の結合、ただし「混合」ではなく「化合」。(←それまで関係なかったものをつないで新たな構造をつくること、環境の模様替え・再設定)。←20 世紀の詩・アート of 創造原理
- LH の旅は、こうした今日的な創造を、先駆的に、生そのものを通して体現したものであった。

日本到着までのラフカディオ・ハーンの旅（移動）の足取り

	旅／移動	著作／Inner Trip
1850 年	ギリシャのイオニア諸島レフカス島（レフカダ島）に生まれる。父はアイルランド出身イギリス軍軍医、母はマルタ島生まれでアラブの血も混じっていると伝えられるギリシャ人。（出生からすでに文化的混血）	* <u>Lafcadio Hearn</u> という名：シンボリックな事実（←「名は体を表す」） ・ <u>Lafcadio</u> ←生地レフカダ島（ギリシャ語で「さまよう」の意）に由来 ・ <u>Hearn</u> ←中世英語 <u>erren</u> ←ラテン語 <u>errare</u> （「漂泊する」の意）に由来
1851（01 歳）	父の西インド諸島転属のため、母と女中（兼通訳）に伴われ、父の生家のあるダブリンに到着。後、両親は離婚、母はギリシャに帰国し、大叔母に引き取られる。	幼年の頃から民話、神話、怪奇話などに異常な関心を示す。
1863（13 歳）	英国本土、北東部のダラム州にあるカトリック系カスパート神学校（現ダラム大）に入学。（遊戯中あやまって左目を失明）	
1867（17 歳）	大叔母の破産のため、遠縁の世話で北フランスのイヴトーにあるカトリック系の学校に入学。	ゴーチエ、フローベール、ボードレールなどのフランス文学に親しむ。
1869（19 歳）	アメリカに渡る。ニューヨークを経てオハイオ州シンシナティに移住。	各種の仕事を見つけては窮乏生活を続ける中、図書館で読書にふける。
1874（24 歳）	『シンシナティ・インクワイアラー』紙の記者。後、下宿先の炊事婦、混血黒人マッティ・フォーリーとの結婚がもとで解雇（当時黒人との結婚は禁じられていた）。	記者となってから、下層社会とくに黒人の風俗を好んで書く。
1876（26 歳）	雑誌『シンシナティ・コマーシャル』の記者となり、生活も安定する。	ゴーチエその他のフランス文学の翻訳に打ち込む。
1877（27 歳）	新たな変化を求めて、ルイジアナ州ニューオーリンズに移住し、新聞記者を色々経ながら、各文化が混血し合うこの町で 10 年間に過ごし、後のラフカディオ・ハーンの基本となる作品を多数発表。	混血文化（クレオール文化）に深い関心を抱く。関連記事を多数執筆。 ゴーチエ、モーパッサン、アナトール・フランス、ボードレール、ロチなどのフランス文学、ツルゲーネフ、ドストエフスキーなどのロシア文学の翻訳紹介。 『異文学遺文集』（エジプト、エスキモ、インド、フィンランド、アラビア、ユダヤなどの民俗伝承再話集） ニューオーリンズでの万国産業博覧会（1884 年）で日本に関心を持つ。『古事記』（チェンバレン訳）を読む。 『ニューオーリンズの歴史的スケッチ』 クレオール俚語集『ゴンボ・ゼーベス』 『クレオール料理法』 『中国怪談集』

資料 1

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
 大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
 © OHIRA Tomohiko, 2009

1887 (37 歳)	<u>西洋以外の未知の世界を求めて、ニューオーリンズを離れてカリブ海西インド諸島のひとつ仏領マルチニック島に渡り、そこで2年間を過ごす。</u>	<u>マルチニックの熱帯美、クレオール混血文化に魅せられる。紀行文、見聞記のほか、ニューオーリンズやマルチニックに想を得た小説（『チータ』、『ユーマ』）執筆。</u> <u>マルチニックの民話を収集。</u>
1889 (39 歳)	アメリカ（フィラデルフィア）に戻り、マルチニック滞在時の体験と記録をもとに執筆に励む。	『チータ』（1889）、『ユーマ』（1890）、紀行文集『 <u>仏領西インド諸島の二年間</u> 』（1890）出版。
1890 (40 歳)	それまでの著作、マルチニック紀行文などが評価され、ニューヨークの『ハーパーズ・マンズリー』誌の学芸記者として日本に派遣され横浜到着。 <u>（その後、日本においても、横浜→松江→熊本→神戸→東京と移住、その間、日本各地を旅行。）</u>	（紀行文「東洋の第一日目」〔発表は1892年〕）

[小泉八雲（上田和夫訳）『小泉八雲集』、新潮文庫、上田和夫編巻末年譜をもとに作成]

関連テキスト（以下、下線部は大平）

(1) ラフカディオ・ハーン「東洋の第一日目」(ラフカディオ・ハーン・池田雅之訳『新編 日本の面影』、角川ソフィア文庫、2008、pp.14-15)

[……]これまでまったく未知だった世界を、この目はたしかに見ている。そんな当たり前の事実を十分承知しながらも、私はどこかうっとりとしていた。その日のあまりの神々しい美しさに、私の意識も尋常ではなかった。日本の春のひんやりした、雪を頂く富士の高嶺から風の波が運んでくる、その朝の空気には、言葉にならない魅力があった。それは、むしろはっきりした色調というより、やさしい透明感による魅力ではないだろうか。異常なまでに澄み渡る、その青味を帯びた空気の透明感に、遠くのものまで驚くほどくっきりと見えている。[……]

まるでなにもかも、小さな妖精の国のようにだ。人も物もみんな小さく、風変わりで神秘的である。青い屋根の小さな家屋、青いのれんのかかった小さな店舗、その前で青い着物姿の小柄な売り子が微笑んでいる。そんな幻想を打ち砕くのは、ときどきすれ違う背の高い外国人と、さまざまな店の英字看板だけである。しかしながら、そんな目障りなものも、現実感を強調するだけで、この面白い小さな通りの魅力が、それで著しく損なわれることは断じてない。

[……]

小さな店舗の様子もわかってきた。どこも、路面より高く上がったところに畳敷きの床があり、看板の文字はたいてい縦書きで、布の上で波打っているか、金色の塗り板の上できらめいている。着物の多数を占める濃紺色は、のれんにも同じように幅を利かせている。もちろん、明るい青、白、赤といった他の色味もちろはら見かけが、緑や黄色のものはない。それから、店員の着物にも、のれんと同じ美しい文字があしらわれている。どんなに手のこんだ意匠でも、これだけの趣は出せないのではないだろうか。もちろん、装飾的な意図をもって手を加えているとはいえ、これらの表意文字には、意味のない図案では決して持ち得ない、均斉のとれた美しさが迫ってくる。

[……]

表意文字が日本人の脳に作り出す印象というのは、退屈な、ただの音声記号であるアルファベットの組み合わせが西洋人の脳に作り出す印象と、同じものではない。日本人にとって、文字とは、生き生きとした絵なのである。表意文字は生きているのだ。それらは語りかけ、訴えてくる。そして、日本の通りの空間には、このように目に呼びかけ、人のように笑ったり、顔をしかめたりする、生きた文字が溢れている。

(2) ラファエル・コンフィアン「素晴らしき旅人ラフカディオ・ハーン」(平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』、ミネルヴァ書房、2004、pp.328-330)

熱帯の日没の実体を本当に理解した人———というか正しくは、実体を言葉に書きとめた人———はハーンが最初だ、と突然さとした日のことを私は忘れはしないだろう。このイギリス・ギリシャ系の新聞記者は、詩人で、民俗研究者で、日々の生活を記録した。その人が私の母国であるマルティニークを19世紀の末近くに訪れ、日没を言葉に書きとめたのだが、それは驚くべき見事さである。[……]私がそのことをさとしたのはある4月の一日の終わりで、私たち島の住民が「たそがれ」と呼

資料 2

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

ぶこともためらうほど劇的に短い瞬間のことである。私はプレー山の頂上を眺めていた。これは1902年に噴火してマルティニークの旧都サン・ピエールの住民3万人を全滅させてしまった火山である。そのとき山頂のまわりの空が極度に澄んで輝いていることに気がついた。その後光は魅力的なグレーとピンクで——火山の両側面も穏やかなオレンジ色に包まれていた。それは私の周囲の大地や森の上に包み込むよう降りてきた層を成す暗闇と鋭い対照をなしていた。実際、空はまだ真昼間なのに、大地はもうほとんど熱帯の夜の神秘的腕に包まれてしまったのである。

その時、3日前にハーンの『西インド諸島の二年間』で読んだ奇妙な文章を思い出した。[……]それまで私はハーンに別に注意を払わなかった。どうせ異国的な風物の魅力を求めて旅した西洋人のダンディーの一人くらいに思っていたからである。だがとんでもない思い違いだった。ハーンが描くマルティニークの熱帯の夜を読んでみよう。

こうした熱帯では「夜」は上から暮れる感じはしない。山頂と山頂が連なるこの土地に「夜」が降りてくる、という気はしない。夜は下から、まるで息を吐き出すかのように、大地から立ち昇る。海岸線がまず暗くなる。——それから斜面と低い丘と谷間が影で包まれる、——それから急速に、闇が高地めざして昇りはじめる。しかしそれでもその高地の頂上は、島の残りが暗闇のとばりで包まれ星が出始めた後もなお数分の間、その尖端で火山のごとく輝き続ける。

2年足らずのマルティニーク生活の間にラフカディオ・ハーンは私たちの間で古くから伝わる黒人霊能師quimboiseurの秘密の世界の一つにはいり込むことに成功した。霊能師たちがよそに洩らすまいとして守り続けた秘密とは、ヨーロッパ人の植民地支配の下で死んだ何千何万というかぞえきれないカリブ人やアフリカ人の霊がひそかにわれわれクレオールの人々を守っていてくれる、という信仰である。この霊はキリスト教徒の霊のように空に住んではいない、そうではなくて昼間はフロマジエ(パンヤの樹)などの御神木の高い枝や梢に眠っている。しかし太陽の最後の光線が輝き始めると、こうした霊たちはたちまちのうちに人々や家や動物や野原を呑み込む暗闇の中にさまよい出る。ハーンはそうしたものの存在を直感した。

(3) ラフカディオ・ハーン「ニューオーリーonzの魔力」(小泉八雲・平川祐弘訳『クレオール物語』、講談社学術文庫、1991、pp.177-178)

赫々たる太陽のもとにまどろんでいるこのクレ奥ールの古都、その古風で趣きのある家々、日かげと木かげの多い町並、百年の昔を偲ばせるその町のたたずまい、気持のよい色の対照、あまたの国民のことばがこだまし合う街々、町全体がいかにも充ち足りて眠っているような感じ、古色蒼然として緑濃い趣き、由緒のある記念館や記念碑の数々、一風変った建築物、熱帯にふさわしい庭園と画趣に富んで人を驚かすさまざまな事物、恐らくはオレンジの花の香りで眠りに誘いそうな暖かい大気が、物真似つぐみの突拍子もない歌声でかすかにふるえている——これらすべての最初の印象がすっかり忘れ去られるなど、あり得ない。百年以上にわたって、ニューオーリーonzは放浪の魂を世界の果てからこの地に引き寄せて来た。この舗道を歩いた者の中には、インドや日本で生まれた人がいた。中国人や色黒のマニラ生まれの人もいた。西インドの島々や南アメリカ出身の人もいた。回教主の臣下もイオニア海の船乗りも、ここに家郷を求めて来たのだった。あらゆる文明国がさすらいの子らをここへ送った。北、東、西の諸国のあらゆる町が、神秘的で甘

美で誰をも捉える魔力を持った、この遠い南の町へ、安らぎを知らぬ魂を委ねたのだ。これら驚き訝るさすらいの子らに、この趣きのある、眠れる、美しい古都がささやく——「私のもとで憩うがよい。年はとった私だが、私以上に若く美しいものに出会ったことはよもやあるまい。[……]」

(4) 平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』(ミネルヴァ書房、2004、pp.54-5)

西洋脱出の願望にとりつかれた当時の西洋の人々にとっては、マルティニークと日本とは、タヒチやサモア同様、ひとしく非西洋として、ある種の共通項をわかちもっていた。そのことは上野の国立西洋美術館にあるゴーガンのマルティニークの絵を見ると一目でわかる[……]。ゴーガンにとってプレー山を描くことはジャポニスムと同一の芸術運動に属する行為だった。その証拠にプレー山の一連のスケッチは日本の扇子の形をした中に描かれている。実はゴーガンとハーンは、同じ時期に同じサン・ピエールの街で、数百メートル離れた場所に住んでいた。そしてハーンは来日以前だったが、プレー山を眺めてこんなことをつぶやいた。それはさながらプレー山をスケッチするゴーガンをふと見かけでもしたような、そんな感想である。ハーンとゴーガンとはその時、異体同心だった。なお文中の「クレオール^{クレオール}の芸術家」というのは黒人ではなく現地生まれの白人芸術家を指している。

時々、プレー山を眺めていると、『富嶽百景』を描いたあの偉大な日本の絵師と似た仕事を誰かクレ奥ールの芸術家がやってくれないか、などと私は思った。あの日本人絵師と同じくらいに生れ故郷の丘や山に愛着と誇りがあり、平野の熱気も蛇も怖れないような人。そんな人が居りさえすれば、『プレー百景』は確実に出来るのだが……

(5) ラフカディオ・ハーン「亡霊」(小泉八雲・平川祐弘訳『クレオール物語』、講談社学術文庫、1991、p. 198)

マルティニーク島にLe Pays des Revenantsという詩的な名前を最初につけた人は、このすばらしい島のことを「人々がまた戻って来る国」だと思ってつけたのである。そこでは自然の得も言われぬ魅力が、まるでギリシャ神話の妖婦キルケの愛撫のように、旅する人の心を魅了する。それだからこの島のことを「亡霊がまた現世に戻って来る国」という意味でLe Pays des Revenantsと呼んだわけではなかった。だがその二つの解釈は、共に真実を含んでいる。このすばらしいマルティニークは、魑魅魍魎が住む島でもある。ほとんどあらゆる農園にその農園固有の霊が住んでおり、お化けが住んでいる。そのある者は、最初誰かの空想でそのお化けが生まれたその土地以外では全然知られていないが、別のある者は、民謡や民話の種となって、住民たち全員の想像世界のものとなっている。どの岬や頂にも、海岸ぞいのどの村や谷間にも、その土地特有の民間伝承があり、口碑がある。

資料2

ラフカディオ・ハーンにおける旅と創造
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

(6) ラフカディオ・ハーン「東洋の第一日目」(ラフカディオ・ハーン・池田雅之訳『新編 日本の面影』、角川ソフィア文庫、2008、pp.33-34)

私は、神道の象徴である鳥居の前に立っている。これまで絵でしか見たことのなかった鳥居を、初めて見たのである。写真や版画でさえ一度も鳥居を目にしたことのない人に、どう説明すればいいだろう。門柱のようにそびえ立つ二本の丸い柱が、二本の横木を水平に支えている。下側の横木は上より小さく、円柱の天辺から少し下がったところに、両端がはまっている。上側の大きい方の横木は、円柱の上にのっかり、左右にかなり出っ張っている。これが、鳥居だ。素材に石か木か金属かの違いはあるが、鳥居の意匠はたいして変わりはない。

しかし、これだけでは鳥居の外観、その威厳、門としての神々しい形姿について、正確に伝えたことにはならない。壮大な鳥居を初めて見た人は、もしかしたら、空に向かってそびえ立つ、美しい漢字の巨大な模型を見た、と想像するかもしれない。鳥居の持つすべての線に、生き生きとした表意文字の品格があり、書の大家が四回筆を揮^{ふる}って書いたような、大胆な角度と曲線を感じさせるからである。

(7) 西田幾多郎のラフカディオ・ハーン論(平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』、ミネルヴァ書房、2004、p.247)

ヘルン氏は万象の背後に心霊の活動を見るといふ様な一種深い神秘思想を抱いた文学者であった。かれは我々の単純なる感覚や感情の奥に過去幾千年来の生の脈博を感じたのみならず、肉体的表情の一々の上にも祖先以来幾世の霊の活動を見た。氏に従えば、我々人格は我々一代のものではなく、祖先以来幾代かの人格の複合体である、我々の肉の底には祖先以来の生命の流が波立って居る、我々の肉体は無限の過去から現世に連るはてしなき心霊の柱のこなたの一端に過ぎない、この肉体は無限なる心霊の群衆の物質的漂微である。

(西田幾多郎はこうした「万象の背後に心霊の活動を見る」考え方を「物活論」と呼ぶ[大平注])

(8) ラフカディオ・ハーン「焼津にて」(小泉八雲・上田和夫訳『小泉八雲集』、新潮文庫、2008、pp.388-390)

[静岡県しずおかの焼津で、精霊流しのしょうりゅうの燈籠とうろうとともに夜の海を泳いだ翌晩の回想]

その晩、わたしはずっと横になったまま目をさまして、巨大な潮が、咆哮し砕ける音に耳を澄ませていた。はっきりした激しい衝撃の音、近くの波の押し寄せる音よりも、さらに太く低く、遠い寄せ波の低音が聞える——それは、建物も震えるばかりの、絶え間ない底知れぬつぶやきである——[……]昇りつつある太陽から、全世界にもわたる大軍の突進する音かとばかり、想像されるのであった。

やがてわたしは、子供のころ、海の声に耳を澄ませたときに抱いた、おぼろげな恐怖心を思い出していた。——そして、後年、世界のさまざまな国のさまざまな海岸で、打ち寄せる波がいつも子供のころの感情をよみがえらせたことを思い出した。たしかに、この感情はわたしより、数百万世紀も古いもので——父祖より伝えられた数知れぬ恐怖の総体であろう。が、やがて、海に対する

恐怖は、海の声によって目ざめさせられた、おびただしい^{いふ}畏怖の一つの要素をあらわすものにしかすぎないという確信に立ちいたった。なぜなら、駿河湾^{するがわん}岸のあの荒潮に耳を傾けていると、人に知られている恐怖のほとんどあらゆる音が聞き分けられたからである。

[……]

そして、わたしはひとりつぶやいた——海の声が、われわれを厳粛にするのは、なんと不思議なことであろうか、と。海のさまざまな発言に合わせて、魂の経験という、より広大な海に動いている、太古からの恐怖のあらゆる波がこたえざるをえないのである。「淵々^{ふちふち}呼びこたえる」目に見える淵は、その潮の流れでわれわれの靈魂をつくった、より古い、目に見えぬ淵に叫びかけるのである。

最終講義

果てなき異邦人としての人間 ～言葉・アート・心・生命と＜異郷＞～

2009 年 3 月 13 日（金） 16:30～18:00

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 1 階 105 室にて

（主催：北海道大学メディア・コミュニケーション研究院）

果てなき異邦人としての人間

～言葉・アート・心・生命と＜異郷＞～

大平具彦

今日の講演は「最終記念講演」という名前なのですが、人間にとってはすべてが通過点であるわけですから、これまで私が考えてきたことをまとめながら、併せてこれから私の仕事の方向性のようなものとして語ってみたいと思っております。

先ずタイトルについてですが、「果てなき異邦人としての人間」、いささか変わったタイトと思われる方が多いかも知れませんが、ここから入ってゆくことにします。この「異邦人」につきましては、資料の関連テキスト1（本書の p. 57）をご覧ください。読みます。「故郷を甘美に思う者はまだ嘴の黄色い未熟者である。あらゆる場所を故郷と感じられる者は、すでにかかなりの力をたくわえた者である」——。この辺はわかると思います。三つ目で一気に転換がありまして、「だが全世界を異郷と思う者こそ、完璧な人間である」——。私はこの言葉を読んだ時にびっくりしました。こんな言葉があるのかと感心したのです。これを誰が言ったかということ、聖ヴィクトールのフーゴーという人で、サイードの『オリエンタリズム』という有名な本の中で引用されておまして、最初に引用したのはアウエルバッハという人なのですが、サイードはいわばそれを孫引きする形で書いたわけです。この言葉がサイードの著作『オリエンタリズム』によって全世界に広まっていったということにして、私にもこれが届いたわけです。「だが全世界を異郷と思う者こそ、完璧な人間である」とは、誰しもが驚いてしまう言葉です。しかしそう明言されてみると、何かそこには深い意味があるのではと思えてしまう、そうした言葉です。講演メモの方を見て下さい。最初に「＜異邦人＞とは——テーマ設定」とありますね。「全世界を異郷と思う」とはどういうことなのか。その資質を身につけた者が「完璧な人間」であるとするならば、人間という存在は「異邦人」であることこそを、真の精神的脊椎としているのではないか。このようなテーマで、本日の話を組み立ててみようというわけです。この聖ヴィクトールのフーゴーですが、12 世紀ドイツのスコラ哲学者です。『デダシカリオン』という本の中でこの言葉を書いております。日本は凄い国ですね、ちゃんとこの本の翻訳が出ております。なお、お断りしてお

きますと、この言葉は 12 世紀のスコラ哲学者のもので、本来は当時のコンテキストにおいて、そこを踏まえて語るべきであろうとは思いますが、ただそこまでは私の力の範囲を超えているということでもありますので、本日においては、サイードの引用によって世界的に流布していったという現在的なコンテキストにのっとなって、考えてゆきたいと思います。

講演メモの二つ目にゆきます (p. 53)。「自国語／異国語 (異邦語)」ということですが、異邦人とか異郷とかと言った場合、人間は言語的存在ですから、それは先ず言語の問題として現れてくるだろうということです。先ほど紹介をしていただきましたけれども、私は大学院時代から、ルーマニア生まれのフランス詩人で、20 世紀アヴァンギャルド運動の中心であるダダ・シュルレアリスム、とりわけダダ運動の主導者であったトリスタン・ツァラを研究テーマにしておりまして、北大に来てからそれを発展させ、1999 年に『トリスタン・ツァラ——言葉の四次元への越境者』という本を現代企画室から出しました。この詩人の名前を初めて聞く人もいるかも知れません。どんな詩を書いている詩人だったのでしょうか。ということで、テキストの 2 を見て下さい (p. 57)。この詩、私は大変に好きなものですので、この部分は読ませて下さい。「鐘は理由なく鳴りそしてわれわれもまた／なぜわれわれを鎖につなぐ鎖の端を探すのか／鐘よ理由なく鳴れそしてわれわれもまた／われわれはわれわれの内部で鳴らすだろう砕けたグラスを／匱金に混ざり込んだ銀貨を／戸口には深淵が広がっているかも知れぬままに／哄笑と嵐となって砕け散った祭典の残骸を／空気の墓を 北極の骨を砕く風車を／われわれの頭を天空に運び／われわれの筋肉に溶けた鉛の夜を吐きかけるあのもろもろの祭典を」。よく分からないでしょう。テーマである異邦人との関連で言えば、日本語に訳されてはいるのですが、まるで外国語、異邦語ですよ。ちょっと個人的な話をしますと、このツァラの詩に出会ったのが、遡ることある私の浪人の時代でありまして、高校で暴れていたもので、浪人をして神田の駿河台予備校に通っていたのです。神田ですから三省堂があります。私、その三省堂で、この詩が収められている本をふと手にとって驚きました。意味としてはよく分からないのだけれども、そんなことは飛び越えて、感覚と脳髓に直接に響いてきたのです。私の父親は音楽をやっていて私が大学 1 年の時に亡くなったのですが、私が小学生の時に病気で倒れました。私はいかにも道楽息子のように思われておりますけれども、実は、自分で言うのも何ですが、非常に苦学生でして、高校の頃から家庭教師などをしておりました。だから貧しくて金がない。でもその本は是非とも欲しい。なけなしの昼食代を回してその本を買いました。実に懐かしい思い出なのですが、その時の出会いが私をここまで引っ張ってしてくれたわけですから、何と言ったらいいいのでしょうか、今にして思うのですが、人間やはりそこそこグレた方がいいですね。ただまっすぐだけでは冒険的な出会いはありませんから。さて、このトリスタン・ツァラ、当時あまり名前は知られていなかったのですが、私にとっては精神的、感覚的な糧となりました。先にも言いましたように、日本語ではいか

にも異邦語という感じなのですけれども、では原文ではどうなのか。原文はフランス語です。フランス文学といえば、ボードレールあり、プルーストあり、ヴァレリーありという風に、錚々たる名前がすぐ並ぶのですが、実はツァラのフランス語は、そういうフランス文学の大家のフランス語とはどこか本質的に違う響きの言語なのです。言うなれば、異性体としてのフランス語。書かれた言語はフランス語でも、他のフランスの詩人のどのフランス語と比べても、どこまでも異性体的なフランス語。私はこれをツァラ語と呼んできました。一種の宇宙語です。どの国語にも回収されないけれども、一方、どの国語とも豊かに響き合い、言葉が宇宙の神経を受肉しながら展開してゆくという不思議な特性を持ったツァラ語。そういう独特な質をツァラの詩語は豊かに備えているわけです。実はこのトリスタン・ツァラというのは、筆名でありまして、ツァラはルーマニア出身なので、ルーマニア語で「トリスト・アン（＝トリスタン）・ツァラ」と発音しますと、「故国にあって悲しき者」の意味となります。それを筆名として選んだということは、詩人ツァラは、「故国の地」ではなく「異邦人」として生きることを当初から直感し、それをプリンシプルとしてきたわけですね。後でまた取り上げますが、このことは是非心に留めておいて下さい。

今、ツァラの例を出したのですが、これは何もツァラ語にだけに限った話ではありません。例えば、日本の瀧口修造。学生当時、ツァラと並んで私のバイブルとなっていた詩人です。テキスト 3 (p. 57) に、彼の「絶対への接吻」という詩を挙げておきました。少し読んでみます。「ぼくの黄金の爪の内部の瀧の飛沫に濡れた客間に襲来するひとりの純粹直観の女性。彼女の指の上に光った金剛石が狩獵者に踏みこまれていたか否かをぼくは問わない。彼女の水平であり同時に垂直である乳房は飽和した秤器のような衣服に包まれている。蠟の国の天災を、彼女の仄かな髭が物語る。彼女は時間を燃焼しつつある口紅の鏡玉の前後左右を動いている。人称の秘密。時の感覚。おお時間の痕跡はぼくの正六面體の室内を雪のように激変せしめる」。これって果たして日本語なの？とつい思ってしまうほど、これまたまるで異邦語ですね。でも、何か途轍もないテンションが言葉を突き抜けていって、言葉自体が何か別物に^{へんげ}変化してゆく化学実験のドラマに立ち会っているような感覚に襲われます。そのためか、途中で眩しくなって読めなくなる。実はこのテキストは自動筆記という方法で書かれていまして、普通にものを書くように内容や構成を考えながら書くのではないのです。論理とか意味とかを突き抜けて、全身全能をペンに集中しハイスピードで一氣に書いてゆく。余計なことを考えない。これはそういう風に書かれたものです。凄いですね。後に瀧口修造はこうした実験をしていた時のことを回想して、「光が一瞬一瞬生まれてゆく、そういう体験をした」と語っていまして、これを「光の記憶」という名前と呼んでいます。きっとそうだっただろうと思わせる迫力がここにはみなぎっている。

詩と言いますと、「この一行は何を表わしているか」というような質問が国語教育などでよく出るのですが、詩は何か表現しているのではないのです。言葉それ自体として

光輝く。言葉それ自体による薔薇の花として咲く。ですから、「何を表現しているのか」という問いは、実は詩の本質が分かっていない誤った問いです。我々は言葉を使っていますから、意味の重力圏、意味の空間内部に閉ざされているのですが、詩はその意味の重力圏を突き抜けていって、宇宙の肉そのものと交わる、そういう営みなのです。ということは、そもそも詩とは、自国語を異邦語に組み換えてしまう営みであるということです。ロシアの詩人にツヴェタエヴァという女流詩人がいるのですが、確か彼女が「詩とは自国語を異邦語にする働きである」と言っています。つまり詩は、何を表わしているかなどという表象を超えて、言語に内在する未知の力と交感する働きなのであって、トリストラン・ツァラはこう言っています。資料のテキスト 4 (p. 57) です。「われわれに必要なのは、強靱で、直截で、的確で、かつ永久に理解されることのない作品である」——。前段が「強靱で、直截で、的確」です。そして後段で「永久に理解されることのない作品」。この言葉こそ、「意味の重力圏を脱して、宇宙の脈動、鼓動と直截に響き合う」詩の働きを雄弁に語っていますね。最初に読んだツァラの詩（テキスト 2 : p. 57）は、そういう働きとしての詩の見事な例であると思います。この辺までが本日の話のイントロ部分です。もう一回確認しておきますと、詩の言葉というのは、自国語の意味の内部では理解されないが、しかし「強靱で、直截で、的確に」一種の電磁作用のように、まるで呪文のように、われわれの脳髓と感覚と身体を突き抜けてゆく「異邦語」であるということです。テーマの「異郷」との関連で言えば、そうした言葉の働きを通して、我々は、一気に「異郷」へと連れてゆかれるわけです。この「異郷」という言葉に注意して下さい。

さて、これまで詩の話をしてきましたけれども、こうした「自国語／異邦語」の関係は、特に詩に限られるわけではなく、詩はむしろその先鋭な代表者であり、実は言葉そのものが、「自国語／異国語」という関係を本来的に内包しているということです。例としてテキスト 5、6 (pp. 57-58) を挙げておきました。最初がフランスの有名な作家ブルーストの言葉で、私が非常に気に入っているものです。「美しい書物は一種の外国語で書かれている」。ここにある「外国語」という言葉なのですが、普段よく使う「日本語に対しての外国語」という意味ではありません。日本語で書かれていても、日常浸っている日本語とは色合いも香りも異なっている日本語、つまりは「一種の外国語」として知覚されてしまう、そういう日本語で書かれている本のことです。ぴったり合う例ではないかも知れませんが、例えば、皆そういう経験があると思いますが、小学生の頃、気にかけている好きな女の子がいて、その子の机のそばを通ると、筆箱、鉛筆、消しゴム、ランドセルなどなど、他の子の物と何の変わりもないのだけれども、その子のだけは違って妖しく輝いて見える。不思議ですよ、日常馴染んでいた風景に、突如闖入してきた妖しいオブジェです。そしてなぜか分からないのだけれど、ついそこに引き寄せられてしまうという、そういう感覚です。これは「一種の外国語」と言っているのではないか。それから、新聞や雑誌でよく見かけるのですが、マンションなどの広告で、

朝食時の写真が写っており、香ばしそうに湯気を昇らせているコーヒーがあって、その脇に新聞なんかが置かれているのだけれど、だいたいそれは横文字なんですね。日本のマンションであってもマイホームは「一種の外国語」にしたいのです。Tシャツだってそうですね。やっぱり横文字にする。日本語だとダサいからでしょうか。びっくりしたのがありました。胸に堂々と「Bullshit」とプリントした若者を見たことがあります。「牛の糞」（転じて「無駄話、ほら」など）ですよ。でも本人は得意気にそれを着ているわけです。一方、外国人、西洋人から見ると漢字はすごく格好いいそうです。それこそ「牛の糞」と書いてあったり。時には、漢字が上下あるいは左右にひっくり返っている時があったり。要するに、自国語から抜け出した「外国語」の雰囲気が好きなのです。この感覚です。それをドゥルーズというフランスの哲学者は、もう少し別な言葉で言い換えています。それがテキスト 6 (p. 58) です。「通常われわれは別の言語においてしか異邦人になることはできない、しかし大事なことは逆に、ほかならぬ自分自身の言語において異邦人であること」。つまり、自国、自分の文化、自身とは別の回路を作り、その知覚を通して、自分の国、自分の文化、自身を新たに知覚し直してゆくという、そういう感覚だと思います。

つまり、ある国語は自らに自足するのではなく、異国語へと自らを開くことによって、新たな血液を得てゆくわけです。これを言語の本来的なあり方として方法化したのが、クレオール思想家・詩人であるグリッサンの「多言語主義」です。テキスト 7 (p. 58) をご覧下さい。ポイント部分に下線を引いてあります。最初のところがポイントです。「多言語主義とは諸言語の共存のことでも、複数言語を知っていることでもなく、自身の言語を使用するときに、そこに世界の諸言語が立ち現れている状態のことである」。続き部分にありますように、18 世紀、19 世紀のフランスの作家は、他の外国語を知っていても、書く言語自体は単一言語的だったということなのですが、今日では言語状況は根底から変化したと言うのです。下線部分です。「ひととはもはやあるひとつの言語を単一言語的に書くことはできず、諸言語の想像的なもの〔世界のあらゆる言語に立ち会うこと〕を考慮せざるを得ないのだ」。そういうことなのです。私たちの今日の世界というのは、まさしくこうした状況が世界的に進展しているのであって、こうした時代、こうした世界空間、こうした都市空間を私たちは生きつつあるわけです。さて次の箇所ですが、私はこの文章が非常に気に入っているのですけれども、「アメリカ人すなわち合衆国人のように、世界のそれぞれの言語に内在するこうした問題を想像しないものたち〔自らの言語を単一言語的にしか考えられない者たち〕は、世界を想像することすらない」。ここ最近、アメリカの単独行動主義に対する批判は色々ありましたけれども、この言葉が最も根源的な批判だと私は思います。「単一言語的にしか世界を思考できない」——、アメリカ的世界観に対する実に鋭い批判です。その一方、グリッサンが引用しているように、キューバの作家カルペンティエルは、こう言っています。「われわれカリブ人は、四つや五つの異なる言語で書いているが、われわれが行なっているのはひ

とつの同じ言語活動なのだ」。これは多言語主義について非常に参考になる言葉ですね。アメリカ的言語使用とは正反対です。

ところで、この多言語主義というのは、実はゲーテやベンヤミンの有名な翻訳論に先駆的に現れておりました。翻訳というのは、一般に考えられているように他国語を自国語にすることではなく——もちろんそうするのですが、そのエッセンスは——自国語を他国語にすること、自国語を他国語によって豊かにすることであるというのが、この両者の翻訳論なのです。グリッサンの言えば、自国語の内部に「多言語」を響かせることですね。テキスト 8 (p. 58) に、ゲーテ、ベンヤミンの翻訳論を載せておきました。最初のもはゲーテです。後でゆっくり読んでいただきたいのですが、下線部のところを見ますと「自国の独自性を放棄することになり、そこに成立する第三のものへ」とあります。つまり外国語を自国の中に同化しているばかりでは、「そこに成立するであろう第三のもの」すなわち自国語と外国語が交わる新たな空間はつくれないのではないか、ということをおっしゃっています。それをさらに発展をさせたのが次のベンヤミンの翻訳論で、これは非常に有名です。翻訳の本質は、「自国語を他国語によってはげしく揺り動かすこと」、「自国語を、他国語によって拡張、かつ深めること」、こう喝破しているわけです。先ほどトリスタン・ツァラや瀧口修造の例を出しましたが、そこに書かれていた日本語が一種の外国語、異邦語のように思えたのは、彼らの言語実践がまさにこうした多言語主義にのっとっていたからなのです。最近、水村美苗さんの『日本語が亡びるとき』という本が話題になっておりますけれども、その関連で言うならば、明治以降の近代日本語こそは、こうしたプロセスを深部から生きた貴重な事例であると言えます。つまり近代日本語の根幹には漢語があり、和語があり、さらにそこにヨーロッパの諸言語が、それこそ多言語主義的に混入した。当時の翻訳者たちの必死の苦闘のおかげで、この私たちの近代日本語はどれだけ豊かになったことか。おそらく、日本人がかつて活力があったというのは、この近代日本語の活力がその基盤であったろうと私は思います。水村美苗氏は、それが今、英語の単一言語主義の中で知的な力が言語自体から失われてゆくという事態を言っているわけで、日本の政治状況も経済状況も沈滞してゆくばかりであるというのも、こうした日本語の状況と深く結びついているはずなのです。要するに、言語は表現の道具などでは決してなく人間の根幹そのものをつくっているわけですから、人間が言語的存在である限りにおいて、以上述べてきた「自国語／異国語」の関係は、人間という存在のあり方をそのものをエッセンシャルに示しているということです。

それをさらに明確に言った人がセガレンというフランスの作家です。テキストの 9 (pp. 58-59) です。セガレンは 20 世紀初めのフランスの作家で、軍医をしていた関係で、タヒチ、中国、チベットなど世界各地を旅行して、独自の本を書きました。最近、世界的に非常に注目されております。「エグゾチスム」という言葉が出てきますけれども、普通使われているエグゾチスムとは違って、それを別の次元に転換して用いていま

す。読んでみますと、「＜エグゾチスム＞の感覚とは、異なるものの観念以外の何ものでもない。＜多様なもの＞の知覚、何かが自分自身ではないという認識以外の何ものでもない」。このグリッサンの言葉は、先ほどのゲーテ、ベンヤミンが語っていた言葉と対応しています。「エグゾチスムの力とは、異なることを把握する力にほかならない」。続けますと、「自己を把握するあらゆる存在は必然的に自己を自分とは異なるものとして把握する」。つまり、自らを異邦人として立ち上げてゆくということです。さらに続けてこう言います。「存在が高揚するのは、＜差異＞によって、そして＜多様なもの＞の中においてである」。私は、世界を旅行したり、色々な本を読むことによって、色々な人に会うことによって、世界はかくも広く、かくも豊かで、かつかくも深いものであるということを、様々に実感してきました。つまり、セガレンが言っているこのエグゾチスムというのは、人間という存在は、そういう世界の限りないこの豊かさとどうやって響き合ってゆくのか、ということに対するひとつの考え方の提示です。さらにセガレンの次の文に移りますと、こうあります。「自分の見たものをまったくその通りに述べるのではなく、自分の存在の反響を、瞬時の、恒常的な転移（*transfert*）によって語ることは、技巧の程度にしたがって変化する芸術の階梯の中では、一段上のものではないだろうか」。いささか難しい表現となっていますが、要するに、芸術というのは、描写する、表象する、何かを表わしている、という風に考えられてきたのだけれど、そういう芸術はもう終わって、言語が多言語主義へと開いてゆくように、表現自体が、表現者自身を今までとは異なった別の存在へと生成変化させてゆく、そういうプロセスが芸術の本来の働きなのだというのが、このセガレンの言葉です。すなわち人は「自らとは異なるものとなることによって」、「自らを＜異郷＞とすることによって」、「自らが＜異邦人＞となることによって」、「その＜転移＞を生きることによって」、自己を創り出してゆくわけです。こうした考えは、最初のヴィクトールのフーゴーの言葉とまさしく通じ合っています。

私はトリスタン・ツァラと、20 世紀のアヴァンギャルド文学芸術運動を専門にしてきました。アヴァンギャルド文学芸術運動とは、ヨーロッパを中心に世界的な広がりで展開され、ルネッサンス以来のそれまでの思考と表現を根底から書き換えていった諸運動のことです。そしてその形成プロセスを追っていきますと、実に興味深いことなのですが、それはヨーロッパ独自の運動ではなくて、その背後にヨーロッパではない地域、すなわちアフリカ、オセアニア、北アメリカなどのプリミティヴ・アート（原始美術）が触媒的に決定的な作用を果たしているのです。つまりアヴァンギャルドというとヨーロッパの先端的な運動と思うかもしれないけれど、その背後では、ヨーロッパが植民地支配していた地域の表現が、ヨーロッパの詩人や芸術家に深いインスピレーションを与えており、その双方が結合して、それがアヴァンギャルドとして展開していった。つまり「文明」を名乗っていたヨーロッパが「未開」という「異郷」と結合して成立していった運動なのです。こういう非常に興味深いテーマがアヴァンギャルド運動の中核にあ

りまして、このテーマを追って私がこの数年書き続けてきたのが、『20 世紀アヴァンギャルドと文明の転換——コロンブス、プリミティヴ・アート、そしてアラカワへ』という本です。予定では2月に出ることになっていて、本当はその辺にうず高く積んで皆さんに買ってもらおうと思っていたのですが、刊行がちょっと遅れていまして残念です。

20 世紀アヴァンギャルドにおけるプリミティヴ・アートとの結合の典型的な例をひとつ見てみましょう。これはピカソの有名な「アヴィニヨンの娘たち」という作品で、現代絵画の原点となったものです。なぜ原点かと言えば、20 世紀の新しい絵画の中心役を担ったキュビズムがこの作品から生まれていったからなのですが、実はピカソはこの作品を描き上げる際にアフリカの黒人彫刻から多大な影響を受けています。画面を見てください。左上にいる女性、それから右上にいる女性、そして右下にいる女性。それらを黒人彫刻（黒人仮面）と並べてみます。リアルなまでにそっくりでしょう。ただ、ピカソの名誉のために言っておきますけれども、ピカソはこれらの仮面を見て、それをモデルとして描いたのではありません。当時パリにトロカデロ博物館というのがあって、ある日何気なくピカソはそこを訪れ、そこでアフリカン・アートを見たのです。実に衝撃的な体験だったそうで、彼は口もきかず一日中そこに佇んでいたとのこと。フランスやヨーロッパの美術史家は「アヴィニヨンの娘たち」の背後には黒人芸術の影響があったことは指摘しますが、それは単なる影響のレベルにとどまっていて、ピカソ自身が黒人芸術に深くインスパイアされて画家として生まれ変わっていったことまでは言いません。ピカソをあくまでもヨーロッパという枠組みの中にとどめておきたいのです。我々の知るピカソがこの「アヴィニヨンの娘たち」によって誕生したということを考えるならば、ピカソはアフリカを通してピカソになったと言ってもいいと私は思っています。ピカソだけでなくほかの 20 世紀のアヴァンギャルド、例えばトリスタン・ツァラも黒人詩編に大変影響を受けていましたし、アポリネールという 20 世紀の詩のパイオニア的な詩人も黒人アートから多くのインスピレーションを得ていました。それから音楽で言えば、ストラヴィンスキーの「春の祭典」。ロシアにはアフリカ、オセアニアのアートは来なかったのですが、ロシアはユーラシアに広がる、ヨーロッパ、スラヴ、イスラム、そしてアジアまでも含む巨大な文化的宇宙でして、ロシアさらにはその周辺地帯の農民の民謡や歌謡が、ストラヴィンスキーの「春の祭典」の素材になっています。このように、どの領域においても、ヨーロッパとそうでない地域すなわち「異郷」との結合としてアヴァンギャルドは展開している。現代の言語表現、芸術表現の基盤となった 20 世紀のアヴァンギャルドこそは、「自らを<異郷>とすることによって」、「自らが<異邦人>となることによって」、「その<転移>を生きることによって」、自らを創出していった文学芸術運動だったわけです。お分かりいただけるように、本日の「異郷」というテーマは先ず詩から入ってゆきました。それが、詩だけではなく、言語全体が、異邦、異郷を真の糧としていることを確認し、そして今見てきたように、20 世紀アヴァンギャルド運動全体においても、その構造は成り立っているというわけです。

ここで話を一歩進めて、20 世紀のアヴァンギャルドの表現原理について見ておきたいと思います。詩については、フランスの詩人ルヴェルディのイメージ論というのがありまして、テキストの 10 (p. 59) に挙げておきました。これも有名な言葉です。「イメージは精神による純粋な創造物である」。詩的イメージとは、描写とか表象とかではなく、創造つまりそこで新たに創り出されるものであるということです。詩といいますと、一般には、比喩があり、メタファーがあるということなのですが、ルヴェルディは、そうではないと言うのです。そこでまったく新しいものとして創られるということなのだ。さらにルヴェルディはこう続けます。「イメージは何らかの比較によって生まれるのではなく、多少ともかけ離れた二つの現実を接近させることから生まれるのである」。比喩や喩え、つまり「雪のように白い肌」とか、「狐のようにずるがしこい奴」とか、こんなのは関係が近すぎて詩にならないのです。まったく別のもの同士を暴力的に一気に結合させる、そういうことを言っています。その典型的な例として、アポリネールという詩人の「太陽 首 切られて」というイメージ表現があります。ショッキングですね、「太陽 首 切られて」——。赤々と鮮烈に私たちの網膜に一気に焼きつきます。「太陽」と「首」は何の関係もない、「切られて」も関係ない。ただ、1 行にこの 3 つの単語を並べると、詩的イメージというものが突如生まれてくる。それまで無関係であった「既知のもの」を結合して、「未知のもの」すなわち「異郷」である「新たな現実」を創出する。こうした詩法は 20 世紀に主流になるのですが、シュルレアリスムはまさしく、このような言語の使い方を「デペイズマン」と言っていました。デペイズマンというのは、いままであったものを「異郷に追いやる」という意味です。さらにもうひとつつけ加えたいのですが、このアポリネールの「太陽 首 切られて」という詩句ですけども、当時のアポリネールの書斎には、アフリカの黒人彫刻や仮面がぎっしりとあって黒々とした妖しい世界をつくりあげており、その詩句の数行前でアポリネールは、自分はその部屋に戻ってそれら黒人彫刻の神々に囲まれて眠りたいのだ、と言っている。そうした状況を色々検証してゆくと、アポリネールのこの詩句は、黒人彫刻、仮面からインスピレーションを得て書かれたものと見て間違いない。つまりこの詩句自体が、ヨーロッパとアフリカという「互いに隔たった異質物相互の結合」によるものなのです。このように 20 世紀のアヴァンギャルドは、形成プロセスにおいても、表現原理においても、「かけ離れた二つの現実」の結合から「新たな現実」を生み出す、つまり現実を「異郷化」する運動であったわけです。

さて芸術運動までできました。自らを「異郷化」することによって生成する存在ととらえるこのアヴァンギャルド芸術の表現においては、では「私」とはどういう場として現れてくるのか。20 世紀のアヴァンギャルドの先駆者であり、同伴者であり、体现者である 3 人の詩人の言葉を、資料の 11 (p. 59) にまとめてみました。「<私>をめぐる言葉」というところです。それぞれに有名な言葉ですので、ご存知の方も多いと思います。先ずランボーです。この文章は自分の先生に宛てた手紙なのですが、ランボーはこの時

17 才です。私がこれを読んだのは浪人時代 19 才の時だったのですが、こいつはやられたなと思いました。だって途轍もないことを言っているでしょう。こうです。「私が考える、と言うのは間違いです。不特定の誰かが私を考えている、と言うべきでしょう。[……] <私>というのはひとつの他者なのです」——。「<私>とは他者なのだ」ということは、「<私>というのは、それ自体が<異郷>にほかならない」ということです。ランボーは 17 才でもうそんな途轍もないこと直感していたわけですから。それと類似した言葉をニーチェが言っています。「一つの思想というものは、<それ>が欲するときによって来るもので、<われ>が欲するときによって来るのではない。従って、主語<われ>が述語<思う>の条件である、と言うのは事態の一つの偽造である」。これも驚くべき言葉です。「それ」と言うのは、自己に同化されていない非人称の何か不特定のもののこと。これは、20 世紀になって発見される無意識というものを先駆的に表現した言葉として位置づけられています。日本でも宮沢賢治という人が、これも大変な有名な言葉ですが、「わたくしといふ現象」と言っている。「私」とは、そう考えられているように固定点などではないのであって、宇宙の森羅万象と、眼には見えない一種の「氣」をコミュニケーションし合って、そして「ひとつの青い照明」として光っている、それを明敏に察知した言葉です。ここにある「あらゆる透明な幽霊の複合体」というのは、「私」を超えて宇宙全体に広がっているありとあらゆる生命でもあり、物質の根源でもあって、私たちはそういうものの「複合体」と実は結びついているのです。その「複合体」との交流によって「私」というのは「青いランプ」として日々こうやって光っているのだということです。そしてあとひとつフレーブニコフの詩を挙げておきました。フレーブニコフはロシア・アヴァンギャルドを代表する詩人です。この言葉もすばらしいと思います。「現し世の全体をぼくらは／ぼくへと、ぼくという多数へ／ぼくという小麦粉へと挽ききざんでいるのだ」——。「私」というのはひとつではなく「多数」であるというわけですから。色々な、自分でも知覚していない「異郷」がたっぷりと自分の中に入っているのですよ、ということです。

今挙げた 3 人が、こうした「私」が「外在化、環境化する場」としての「都市」というものを求めたのは、非常に興味深いことだと思います。ランボーは 19 才の時、まったく詩を放棄します。これはフランス文学の奇蹟なのですが、その後は何と世界中を放浪します。凄いですね、ジャワの方も行く、アフリカの方も行く、そして最後にエチオピアに定着して、奴隷商売などに従事する。最近この詩作放棄後のランボーの研究が進みまして、彼はそのエチオピアから何と次から次へと土木関係、建築関係、技術関係の書籍を膨大に注文している。一体何に取り憑かれたのか、この人は。どうも彼は、それまでであった都市とは全然違う都市をつくってみようと思っていたらしいのです。どういう都市を考えていたのでしょうか、興味津々です。宮沢賢治にゆきましょう。賢治が「イーハトーブ」という理想郷を考えていたことはよく知られていますね。これは岩手県のことです。最近岡村民夫さんという方が『イーハトーブ温泉学』という本を書きました。

それによると宮沢賢治は、まさしく大地の巨大なエネルギーである温泉と人間との交流の場としての温泉リゾート郷を考えていた。つまり人間が地球あるいは宇宙と共鳴しあう場として彼はリゾート——リゾートは一種の都市です——を考えていたわけです。途轍もないスケールの話ですね。「私という現象」と言った宮沢賢治は、実はこういう場を花巻に作ろうとしたのです。一方、「私という多数」と言っていたフレイブニコフですけれども、この人は「鉄の子音とガラスの母音」からなる未来の都市を夢見ていました。美しい言葉ですね、「鉄の子音とガラスの母音」からなる未来の都市。このように見てくるならば、他にもたくさんいるのですがその代表としてのこの3人は、詩とかアートとかいう表現を超えて、いや、詩やアートを拡張して、人間の生（生命）が、従来までの「私」とは別の実在へと生成する場や環境の建築をめざしたのではなかったか。そういうことが言えると思います。

さて、アートの原論そしてその拡張版までできました。もう一段階拡張して、芸術から、生命・心・文化と「異郷」というところにゆきます。実はこれまで述べてきたテーマは、詩や芸術の領域だけにとどまらず、今や生命論、認知論、文化論にまで拡張されてきています。それを見てゆきたいと思います。木村敏という精神医学者がいるのですけれども、精神医学だけでなく哲学や生命論についても著作が多く、日本のみならず海外でもフランス語で論文をいくつも発表しています。私はこの方の『あいだ』という本を読みまして感動いたしました。詩やアートだけでなく、人間の営み全体、そして生命の営みまでもが「異郷」を核としていることが論じられていたからです。テキストを見てみましょう。テキストの12 (pp. 59-60) です。生命は外界と内界の「あいだ」を生きる存在、環境的実体であることが述べられています。「われわれは人間である前に、なによりもまず生物である。生物である以上、われわれは生命一般の根拠とのつながりを絶えず維持し続けなければならない。[……] この＜生命一般の根拠＞とのつながりを維持し続けるために、生命は不断に変化する外界にそのつど対応して自らの内界を変化させてゆかねばならない」。ドイツの生命学者にヴァイツゼッカーという人がいるのですが、その人が「主体」と呼んでいる考え方——これは哲学的によく言われる近代的主体の主体ではなく、実存してゆく実体のことです——、言うなれば、ある方向へ向かおうとする生命の根源的な力と言っていいと思いますが、それを援用してさらにこう述べられます。「われわれが＜自己＞と呼ぶものもこの生物学的主体の延長線上にしか考えられないものであって、自己とは要するにわれわれと世界との＜あいだ＞に働いている、世界との関わりの原理にほかならないのである」。生命一般が、自身と世界との「あいだ」として存在している。「あいだ」という構造が、原理的に自らの内部に外部を、すなわち「異郷」を含んでいるということです。我々は普段何気なく使っていますが、「人間」という言葉の中に「間」という字が入っていますね。人間は「間を生きる人」なのです。それから「空間」、「時間」。これらにも「間」が入っていますね。我々は何の意識もなく使っているのですが、「人間」にせよ「空間」にせよ「時間」にせよ、最も根幹的な

この3つの言葉に「間」という文字が入っているということは、後で触れますけれども、西洋的知との関連で実に意味深いことと思います。

さて、今の話は生命についてでした。今度は心へと話を進めます。これも最近出たものですが、『<心>はからだの外にある』というタイトルの本です。「<心>はからだの外にある」だって？まさか、と思うかも知れませんが、引用文を読んでみましょう。テキストの13 (p. 60) です。著者の河野哲也という人は哲学、認知論が専門です。「私たちは環境を所有することで、環境に所有される。環境の所有とは環境を身体化することである。所有は、この意味で、自-他、主観-客観の二分法を超えている。心は身体と環境との関係性のなかで成立するという意味においては、まさしく<身体の外にある>と言えよう」——。同じように、認知論、知覚心理学の下條信輔氏もこう書いております。「逆説的に聞こえるでしょうが、意識のもっとも意識らしい頂点の部分において、心は、無意識の領域へ、そして生理、身体、世界へと際限なく漏れ出すのです」。このように、心は身体の外にあるのです。というか、この宇宙では内は外であり、外は内なのであって、我々は、それを内／外と区切ってしまうけれども、生命という実体は、そういう図式的なあり方ではないということです。

生命、心と進んできました、今度は文化です。文化接触の本質もまた、異文化を理解するとか、異文化を自らの文化に同化することではなくて、翻訳の構造と同じで、自らの文化を<異郷化>することである、という文化理論を立てたのが、ジェイムズ・クリフォードというアメリカの文化人類学者です。これがテキストの14番 (p. 60)。「人類的ヒューマニズムは、差異に始まり」とあります。この場合のヒューマニズムとは、要するに近代の思想を導いてきたヒューマニズムのことで、自己と異なるものを理解しようという善意に満ちてはいるが、自分の文化と違うものがあれば、自らの文化尺度で解釈をして自分の文化に同化する、そういう立場のことがここに書かれています。後半部では、それに対して逆の考え方が述べられます。ここにある「民族詩的シュルレアリスム」とは、先に触れたシュルレアリスムをクリフォードが文化人類学的に捉え直したもので、クリフォードはそこに新しい文化人類学の立場を見出そうとしました。こうあります。「民族詩的シュルレアリスムは、それとは対照的に、他者性の侵入すなわち意外性を呼び起こすことにより、見慣れたものを攻撃する」。先ほど、シュルレアリスムのところで、「デペイズマン」すなわち「言葉を異郷化する」という話をしました。文化もそれと同様で、自国の文化の中に他の文化を同化してその差異をなくすのではなくて、逆に、自国の文化を絶えざる異郷化のプロセスへと開くことこそが文化的多様性の根幹だということを喝破しているのが、このクリフォードの文化論です。これは、ゲーテ、ベンヤミンの翻訳についての考え方と同じ構造をしていますね。こうして見てくると、20世紀のアヴァンギャルドの表現原理、すなわち、無関係のまま離れてあった「既知なるもの」を結合させて、「未知なるもの」つまり「異郷」や「新たな外部」を創り出すという方法は、ここで述べられている、生命、心、文化の構造のあり方にまで拡張

され適用されていることがお分かりと思います。

さらにもう一段階拡張してみます。心が体の外にあるのであれば、それでは生命(脳)は外在することになるのではないか、ということです。すべては外部(異郷)とつながっている。すべてのものは外部とつながることによって、自らの生をまっとうしてゆく。であれば、生命は個々の内部にあるというよりも、「外在」していると考えた方が、より合理的ではないのか——。こうしたことに関連したテキストをここにいくつか集めてみました。挙げたのはル・クレジオ、ノーベル賞を昨年取りましたね。オクタビア・パス、この人も 1990 年にノーベル賞を取っている。それから今日のテーマのひとつである荒川修作。先ずテキストの 15 (p. 60)、ル・クレジオの『悪魔祓い』という本からの引用です。ル・クレジオという人は、1960 年代に前衛的小説家としてフランス文壇で華やかにデビューをします。しかし、西洋文化のあり方に飽き足らなくなつて西洋を脱出します。そしてパナマ・インディオとともに暮らしたり、メキシコの文化に深く分け入って、この世界の知の根源を探究してきた人で、それが評価されてノーベル文学賞になったのだと思います。さて私が驚いたのは、彼が『悪魔祓い』の中で、パナマ・インディオが夜に奏でる足笛の音楽について、こういう記述をしている部分です。「言葉を殺すための音楽、言葉よりも早く進むための音楽。理解するための音楽ではなくて、苦しくて、極度に意識的な熱狂。するとたちまちのうちに、宇宙の模様が見られ、聞かれ、感ぜられ、知られる。一閃のきらめきのうちに社会のかなたに達する音楽。歴史や図面や地図がなんになろうか。もはや個人もなければ、支配もない。問いもないし答もない。粉碎された対話。頭脳は外部にある。そのことだ、恐ろしくて美しいのは。頭脳は外部で生きているのだ」。そう、「頭脳は外部にある」のです。実は、ル・クレジオは 3 年前の 1 月に札幌にやって来まして、シンポジウムをやったのです。今福龍太氏がオーガナイザーだったのですが、私は通訳を依頼され、パネリストとしても参加しました。その時に私、今の文章について質問したのです。ル・クレジオの答えは、「まさにその通り、脳は外在するものなのだ」とのこと。続けて氏はこう語りました。「現に我々が夜に見る〈夢〉は脳が外部へと出てゆく現象であり、作家の使命はそれを言語化することである」と。私たちが何気なく考えている夢ですけれども、夢というのは、我々の内部に眠っているまさしく「異郷」なのですね。詩・アートこそは、実は、こうした「外在する脳」(宇宙の脳)とつながる営みなのではないでしょうか。宮沢賢治が「わたくしといふ現象は／[……]あらゆる透明な幽霊の複合体」と言っていましたが、この「あらゆる透明な幽霊の複合体」、これが「外在する脳」です。

オクタビア・パスにゆきましょう。テキストの 16 (p. 60) です。オクタビア・パスはメキシコの詩人で批評家です。ノーベル文学賞も受賞している。メキシコ先住民の文化、それから文化人類学、ヨーロッパ近代の詩、芸術、思想すべてを吸収して、さらにはインドや中国など東洋の文明、日本の文化についても実に造詣が深く、共訳ですが『奥の細道』のスペイン語訳まで出しており、まさしく文明の十字路を体現している詩人で

す。そのオクタビア・パスがこういう詩を書いているのです。「私ではなく、私は存在せず、われわれはいつもわれわれであり、／生命は他者であり、いつも彼方にあり、さらに遠方にあり、／おまえの外部にあり、私の外部にあり、いつも地平線であり、／われわれを誘引し、忘我させる生命」——。「生命は外在する」ということをオクタビア・パスはこう雄弁に歌っているわけです。関連したことを述べますと、インスピレーションというのがありますね。皆さん経験しているように、あれはふとやってくるのです。不意に外からやってくる。頭でギリギリ追っている時はやってこないのです。ある何気ない瞬間に訪れる。その時は決まって肩の力が抜けている時です。インスピレーションというのは、「外在する脳」の訪れ、それとの交信の成り立ちです。我々が「異郷」に牽引されるのは、われわれの脳が「異郷」に浸されているから、その双方がつながろうとしているからなのでしょう。人間は、こうしたありようにおいて、世界的にも、自身に対しても、まさしく「異邦人」なのではないでしょうか。

さて、いよいよ荒川修作です。「建築的身体」という荒川修作ならではの考えを、簡略なものなのですが、テキスト 17 (p. 61) に載せておきました。この荒川修作は、1960年代にアヴァンギャルド画家として出発しました。アメリカに渡って、それまでとはまったく違う絵画作品を発表してゆきます。そして世界的な注目を浴び、次々と賞を取ってゆくのです。私は 60 年代の学生時代は、ツァラと瀧口修造と荒川修作で生きていたので、展覧会があると必ず見に行っていたのです。帰ってくると彼の作品の磁力がいつまでも頭の中でさざめいていて、そんな感じでした。荒川修作は世界的に著名な画家なのですが、今や画家をやめて建築作品をつくっています。「外在する生命」を、「私」などというちっぽけなものではなく「われわれという公共的実体」を、まさしく人間の環境として、具体的な現実として構築してゆこうというのです。テキスト 17 (p. 61) は、いささかわかりにくい文章なのですが、「手続きを通した建築とは、[……] 世界が作り出す環境を手続きを通して拡張し」とあります。この手続きあるいは手続き的な知というのですが、西洋近代の知のように論理的な知的体系として組み立てられているものではなくて、身体を通して、経験を通して身についてゆく知のことです。一番代表的な例は、自転車に乗れるようになる際に動員されている知です。自転車というのはそもそもどういう構造なのか、スポークとは何なのだ、ペダルをどう回転させればいいのか、などと理論的に研究していても自転車には乗れない。そういう人は馬鹿ですね。そんなことは究めなくても、身体の方で自然と乗れるようになっている、そうした知です。こうした知を「手続き的知」と呼びます。コロンブスから 500 年、近代科学、近代哲学を生んできた知は、こうした身体知とはまるで逆の道を進んできました。すべてを要素に還元し、座標を設定し、その関係式によって世界を対象化しようとする立場です。それが今の文明を築いたと同時に途轍もない荒廃を一方でもたらしている。これはもう時効なのです。もうこれではやっていけない。そういう現在の状況に対して、荒川はオルタナティブを提起している。手続き知を通して、ポエティックな詩的な想像力を通し

て、オートポイエーシスという言葉が最近よく聞かれますけれども、そういう新たな知を用いて、そしてもちろん今まであった科学を追っ払うのではなく、そういう科学をも有効な部分は動員して、アートを動員して、哲学を動員して、人間の生命を新しくつくってゆこう、つくり直してゆこうというのが、荒川の建築のテーマです。その驚くべき建築の例を今日持ってきました。画像をみて下さい。「三鷹天命反転住宅——ヘレン・ケラーのために」という凄い名前のついたマンション建築です。私は何度か行っているのですが、ご覧のように度肝を抜かれる感じです。ある漫画家が赤白の縞の入った自邸を建てるということで騒ぎが起きましたが、三鷹ではそういう反対運動は起きなかったらしい。三鷹のごく普通の住宅街にこれがドーンと建っている。でも5分も見ていると視覚的に馴染んで実に美しく見えてくる。不思議です。これは建物内部です。和室もあるのですが、畳が四角にではなく円形に収まっている。瀬戸内寂聴という人がいますが、この方は荒川修作と懇意で「これこそ精神の場だ」と言っています。これは真ん中のキッチンの周りで、ここに向かって傾斜がついていて、いわゆるたたきになっている。ここを裸足で歩くと非常に気持ちいいんです。近代的に硬直していた身体が、足裏の身体感覚を通してほぐれてゆく感じです。大人は既成の感覚が邪魔をしてついあたふたとしてしまうのですが、子供たちは凄いですね、いっぺんにこの建築に適応してしまう。ここに一旦入ると嬉々として遊ぶ。この球面の壁を登っている男の子を見て下さい、もう昆虫です。生命をヒトだけに封印せず、他の生命体とも通じ合っている。いい光景ですよね。荒川修作に言わせると、「外在する生命」を最も典型的に示しているのは、生まれ落ちたばかりの乳児だそうです。「おぎゃー」とひたすら絶叫している。まだ言語も知識も刷り込まれていない。何億年も経てきた生命そのものが爆発しているわけです。それがお母さんを通して、環境を通して、言葉を覚えて、私たちのように人間になってゆくのだけれども、であれば、もっと別の回路をつくってあげれば、もっと別の環境の中で生きてゆけば、今我々が生きている人間とはもっと別の存在をつくれるのではないか、そしてそれは別に乳児だけに限らず、普通の（ただし感度のよい）大人に対しても可能なのではないかと、荒川修作は考えているわけです。三鷹天命反転住宅についてのこの本の帯に、河本英夫さんというオートポイエーシス論で有名な哲学者がこう書いていますので見て下さい。「ついに人間の可能性を作りかえるほどの建築が出現した。幾何学で構成された建築に安住してきた結果、私たちはいまだ各自の能力の2〜3%しか活用できていない。人間の、生命としての能力を最大限に発揮させる建築、天命反転住宅は人類史上最大の革命である」。本当かと思う人が多いかも知れません。私は真面目に信じていますよ。いいじゃないですか、生きてゆくにはひとつぐらい信じていなければ。何かに賭けるのです。学問的正確さとか言うでしょう、そういうのは後からなのです。戦術の話などではないのです、戦略的に、俺たちの生活とか社会とかを何とかするのだと思い込まねば道は開けません。当然ミステイクもあるだろう。でも、それは手続き的知によって、自然に修正されてゆくのです。それを荒川みたいにギリギリとやる。

私はアカデミーの世界が実は嫌いでした。大したこともない細かなことの論証ばかりにこだわって、大きな視野でものを見ることができない。要は、物事をどういう枠組みを提示するかなのです。

この三鷹天命反転住宅には「ヘレン・ケラーのために」という副題がついていまして、なぜヘレン・ケラーなのだと思うかも知れませんが、ご承知のように、彼女は、話せない、聞こえない、見えないというハンディキャップを負いながらもあれだけの活動をした。ヘレン・ケラーは、人間の可能性を数十倍拡張したのです。我々はそうした能力を眠らせている。健常者とか障害者とか言って、障害者という言葉は差別的だとか言うでしょう、実は健常者という言葉の方がよっぽど差別的かも知れませんよ。健常者というのは自分が正常だと思って、能力を発揮しようとしめない愚かな人たち、ということになるわけですから。「ヘレン・ケラーのために」という副題は、自身の能力を2~3%しか活用しないで生きている我々に対しての、生まれ変わりへの呼びかけなのです。ここでひとつ、ポイントとして言いたいのですが、こうした思考は、文明史的に見るならば、実は、主体すなわち理性の担い手としての「私」と、客体すなわち世界とを切り離してきた西洋流の近代の知の組み換えとして展開されてきています。先ほどからその例をいくつも挙げてきました。ランボーの「<私>というのはひとつの他者なのです」という言葉、これはデカルト的主体のアンチテーゼです。宮沢賢治「わたくしといふ現象は[……] あらゆる透明な幽霊の複合体」。つまり「私」は主体ではなく「現象」として捉えられるようになりました。ル・クレジオは「脳は外在する」と言っている。実は、日本や東洋などの非西洋世界では、生命（人間、生きもの、万物）は宇宙的な流動的な実体として捉えられており、それを宮沢賢治は「あらゆる透明な幽霊の複合体と」表現しているのですけれども、ところが近代科学によって、そうした発想は前近代的な考え方として退けられてきました。だが、最近の哲学や科学においては、こうした考え方が、むしろ、より合理的で、より包括的で、よりトータルな見方として捉え直されてきている。ですので、日本や非西洋世界の生命観と、この「外在する生命」という考えとは親和性が非常に高いと言えます。このように、「私」、「世界」、「生命」の捉え方を軸に、今や文明の巨大な転換が進行している。荒川修作の話をまた出しますと、荒川修作は、「21世紀の日本の主要産業は哲学であるべきだ」と言うのです。哲学など金にならないじゃないかと、実業にしか頭がない人は言うかも知れないけれど、今までつくられてきた文明に代わる新しい価値をどうやって創造してゆくかということを、荒川独特の言い方で言っているのだと思います。そうした哲学を介して新しい産業が生まれてゆくのです。それがうまくゆけば、日本は新たな文明の、新たな産業の担い手になれるではないですか。科学は今や技術主義に陥っている。その代表的な例がご存知のように金融工学で、そのなれの果てが昨今のサブプライムローンです。資本主義と近代科学はセットの形で生まれてきたんだけど、それが今やまったく行き詰っている。それを、今まで述べてきた生命観や、世界観や、「私」観をベースにして、哲学、芸術、科学を総

動員して、今まで文明の状況を組み換えてゆこうという文脈のもとに、荒川修作の建築がある。最近しきりと言われるように、今が 100 年に一度の危機であるならば、それは同時に 100 年に一度のチャンスであるということです。今日は学生さんもいっぱい来ているけれども、こういう時だからこそ、本当に勉強して下さい。荒川修作に負けずに。日本というこの地は、西洋のものを見ることもできるし、そうでないところのものも見るができる。つまり非常に有利な位置にあるわけです。私は仏文学をやってきましたけれども、フランスを通して、ヨーロッパを通して、私は非常に多くのことを教えてもらいました。その意味でヨーロッパは私の親父だと思っています。ですが、ある時期から、ヨーロッパだけが必ずしも世界ではないと思い始めまして、ヨーロッパも含むような全体的世界に対する見方はどういうものだろうかということを追って、私は研究者の後半を生きてきました。今日お話していることはそれがテーマとなっているわけです。

ということで、いよいよ最後です。トリスタン・ツァラの詩からの引用で話を締めたいと思います。「故国にあつて悲しき者」、すなわち、どの地にあつても、自身の言語においても、そして自身に対しても、どこまでも「異邦人」たろうとしたトリスタン・ツァラ。そうした彼の思考を凝縮した言葉が、最後のテキストの 18 (p. 61) です。「私は言葉がその核のまわりに織る熱のことを考える／ひとがわれわれと呼ぶ夢」——。「ひとが<われわれ>と呼ぶ夢」ということは、すなわち「われわれ」とは、私たちがその現われにほかならぬ夢であるということですね。ではこの「われわれ」とは何なのか。この「われわれ」というのは、「私」の単なる複数などではなく、ランボー的な「私」、賢治的な「わたくし」、フレイブニコフ的な「私」などなど、従来までの「私」とは異なった新しい人間のあり方、その総体としての「われわれ」であると思います。「言葉がその核のまわりに織る熱」とありますが、その「熱」こそわれわれ人間の思考のたんぱく質であり、言葉こそは世界・生命を織り上げる素子（モナド）です。そして、そうした「熱」を通して現れてくる「<われわれ>と呼ばれる夢」。それは一人称複数形なんかではありませんね。もっと多人称的な、トランスパーソナルな「われわれ」です。荒川は、「トランスヒューマン [Transhuman]」という言葉を使います。パスの「われわれ」もそういう意味でした。ですので、ツァラの「われわれ」も、荒川修作やパスと同じような意味で用いられているのだろーと思います。

最後に結びとして。これはツァラや荒川を通して生きてきた大平の個人的かつアンビシャスな思いなのですが、宇宙は「異邦」を通して進化してきたのではないかと半ば妄想、半ば真面目に考えております。宇宙という圏における異邦人、これは生命です。宇宙空間の無限の広がりの中に地球などいうものがあって、そこに生命がある。不思議です。その生命が進化してきて、人間という存在が出現した。人間が他の生命とちがう点は、生命ということについて何かを知っているということでしょうか。いや分かりませんよ、他の生きもの、たとえば蟻なんかも生命ということを知っているかも知れない。他の生命は人間にはない感覚をもっていますからね。荒川修作と養老孟司が対談し

て、その中で養老さんがこう言うんです。「科学は月にロケットを飛ばして、それが最先端だなんて言ったりしているけれど、それがどうした。ぼくは感心したりしない。悔しかったらハエでも蚊でもつくってみろと言いたい」。同感ですね。荒川修作も「じゃ、おまえたち蜘蛛の巣をつくれるか」と言います。つくれませんよね。人知を超えた能力が生命に入っている。でもこうしたことを考えてしまう点において、この生命の中の異邦人、それが人間です。そして人間は意味のシステムをつくり出した。人間は意味のシステムから出るとは生活上、社会上出来ないけれども、そこから外に出ようとする、それが詩やアートです。つまり詩やアートは、人間という生命圏における異邦人であるわけです。そういう営みとして詩やアートがある。だからそれは「異郷」をめざす。こうして見ると、すべては「異郷」同士でつながっている。その通路を生きること、それが「果てなき異邦人としての人間」です。はい、本日のテーマに帰ってきました。以上、学生時代から今日に至るまで私のテーマ、私の探索の旅について、その旅程をうんと凝縮して話してきました。何かのご参考にしていただければ幸いです。長時間おつき合いいただき、どうもありがとうございました。

◆添付資料◆

※当日配布された資料を、本叢書用に整形・再録

講義メモ：	果てなき異邦人としての人間——言葉・アート・心・生命と＜異郷＞	……53-56
資料：	関連テキスト	……57-61

果てなき異邦人としての人間

——言葉・アート・心・生命とく異郷>

1. 「異邦人」とは——テーマ設定

→資料 txt1 参照。

ここにある「全世界を異郷と思う」とはどういうことか。その資質を身につけた者が「完璧な人間」であるとするならば、人間という存在は「異邦人」であることこそを、真の精神的脊椎としているのではないか。

2. 自国語／異国語（異邦語）

・大平：大学院からの研究対象＝トリスタン・ツァラ（ルーマニア生まれのフランス詩人。20 世紀のアヴァンギャルド運動ダダ・シュルレアリスム、とりわけダダ運動の主導者→著作：大平具彦『トリスタン・ツァラ——言葉の四次元への越境者』、現代企画室、1999）

・ツァラの詩→資料 txt2：まるで異邦語の響き。原文はフランス語だが、フランスの他の詩人のフランス語と比べても「異性体的な」フランス語→「ツァラ語」、一種の「宇宙語」。（実はトリスタン・ツァラ Tristan Tzara は筆名。ルーマニア語で発音すると「故国にあつて悲しき者」の意）

・これは何もツァラだけに限った話ではない。たとえば日本の瀧口修造の詩→資料 txt3

これも日本語ではなく全くの外国語。途中で眩しくて読めなくなる。→彼の後年の回想：「光の記憶」

・ということは、そもそも詩とは、自国語を異邦語に組み換えてしまう営みであり（←ツヴェタエヴァ[ロシアの詩人]）、表象を超えて、言語に内在する未知の力と交感する働き。→資料 txt4 すなわち——、
 →詩の言葉：「自国語」の意味の内部では「理解されない」が、しかし、「強靱で、直截で、的確に」、
一種の電磁作用のように、まるで呪文のように、われわれの脳髄と感覚と身体を突き抜けてゆく「異邦語」。そこにおいて、われわれは一気に「異郷」へと連れてゆかれる。

・しかし、こうした事態は、特に詩に限られるわけではなく（←詩はその[先鋭な]代表者）、言葉そのものが、「自国語／異国語」の関係を、本来的に内包している。→資料 txt5、6

→ある国語は自らに自足するのではなく、異国語へと自らを開くことによって、新たな血液を得る。

→これを、言語の本来的なあり方として方法化したのが、クレオール思想家、詩人グリッサンの「多言語主義」→資料 txt7

・有名なゲーテ、ベンヤミンの翻訳論：この「多言語主義」の先駆的体现。→資料 txt8

翻訳：一般に考えられているように、他国語を自国語にすることではなく、その本質は、自国語を他国語にすること。（グリッサンの言えば）自国語の内部に「多言語」を響かせること。

（←明治以降の近代日本語は、このプロセスを深部から生きた事例[←水村美苗]）

・人間が「言語的存在」である限りにおいて、以上の「自国語／異国語」の関係は、人間という存在のあり方そのものをエッセンシャルに示しているはずである。

3. 人間は自らの<異郷>を生きる存在——20 世紀アヴァンギャルドとく異郷>

・「自国語／異国語」の関係を人間の生の根本としたのが、セガレンの<エグゾチスム>→資料 txt9

→すなわち：人は、「自らとは異なるものとなることによって」、「自らを<異郷>とすることによって」、

講義メモ

果てなき異邦人としての人間
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

「自らが＜異邦人＞となることによって」、「その＜転移＞を生きることによって」、自己を創り出してゆく。(←冒頭の聖ヴィクトールのフーゴーの言葉)

- ・20 世紀のアヴァンギャルド文学芸術運動(ヨーロッパを中心に世界的な広がりで開催され、ルネッサンス以来のそれまでの思考と表現を根底から書き換えていった諸運動)は、その形成プロセスを追ってゆくと、実は、ヨーロッパの文学芸術と非ヨーロッパ(アフリカ、オセアニア、北アメリカ)のプリミティヴ・アートとの結合、すなわち、ヨーロッパが＜異郷＞と結合した運動であった。(←大平具彦『20 世紀アヴァンギャルドと文明の転換——コロンブス、プリミティヴ・アート、そしてアラカワへ』[人文書院、間もなく刊行])

*その典型例:ピカソ「アヴィニヨンの娘たち」(画像表示)

→現代の言語表現、芸術表現の基盤となった 20 世紀アヴァンギャルドこそは、「自らを＜異郷＞とすることによって」、「自らが＜異邦人＞となることによって」、「その＜転移＞を生きることによって」、自らを創出していった文学芸術運動。(←現在の「文化的多様」を切り拓いた偉大なるパイオニア)

- ・20 世紀アヴァンギャルドの表現原理:ルヴェルディのイメージ論→資料 txt10

例:「太陽 首 切られて」(アポリネール)

←無関係であった「既知のもの」を結合して、「未知のもの」(「異郷」=「新たな現実」)を創出

*こうした詩法をシュルレアリスムはまさしく「デペイズマン」(dépaysement:「あるものを異郷におくこと、追いやること」と呼んでいた。

*実はアポリネールのこの詩句は、黒人彫刻、仮面からインスピレーションを得て書かれたもの、すなわち、ヨーロッパとアフリカという「互いに隔たった」異質物相互の結合によるもの。

→このように 20 世紀アヴァンギャルドは、形成プロセスにおいても、表現原理においても、「かけ離れた二つの現実」の結合から「新たな現実」を生み出す(=現実を「異郷化」する)運動だった。

- ・人間:自らを「異郷化」することによって生成してゆく存在。そこでは「私」とはどういうトポス(場)であるのか。→20 世紀アヴァンギャルドの先駆者、同伴者、体现者たちの言葉:資料 txt11

そして彼ら三人がいずれも、こうした「私」が「外在化、環境化する場(都市)」を求めたのは興味深い。

-ランボー:詩作の放棄後、世界を放浪(←「風の踵を持つ男」)。そしてエチオピアに定着後、膨大な量の土木、工学、技術、建築関係の書を購入!:都市の建設を構想!(←G.Dolto: *Rimbaud ingénieur*、野村喜和夫『ランボー・横断する詩学』)

-宮沢賢治:「イーハトーブ」、大地の巨大なエネルギーと交流する「温泉リゾート郷」(←岡村民夫『イーハトーブ温泉学』)

-フレーブニコフ:「鉄の子音とガラスの母音」からなる未来の都市

→であれば、彼らは、詩・アートという表現を超えて(というか、詩・アートを拡張して)、人間の生(生命)が、従来までの「私」とは別の実在へと生成する場(環境)の建築をめざしたのではなかったか。

4. 生命、心、文化と＜異郷＞

- ・これまで述べてきた原理は、実は、詩や芸術の領域だけにとどまらず、今や生命論、認知論、文化論にまで拡張されてきている。

-生命は、外界と内界の「あいだ」を生きる存在(=「環境的実体」):→資料 txt12

(人間:間を生きる人 cf.空間、時間 →日本語で、人間、空間、時間のいずれにも、「間」というトポスがどのように組み込まれていることは、西洋的知との関連で実に意味深いこと。)

-「＜心＞はからだの外にある」!(←河野哲也の著作タイトル):→資料 txt13

-文化接触の本質もまた、異文化を理解するとか、異文化を自らの文化に同化することなどではなく、

自らの文化を＜異郷化＞すること！（←翻訳の構造と同じ）→クリフォードの文化論：→資料 txt14

- ・以上、20 世紀アヴァンギャルドの表現原理（無関係のまま離れてあった「既知のもの」を結合させて、「未知のもの」すなわち「異郷」[＝外部、新たな現実]を創り出す）と相同であることに注意。

5. 生命(脳)は外在する

- ・このように、すべては外部(異郷)とつながっている。すべてのものは、外部(異郷)とつながることによって、生を全うしてゆく。であれば、生命は個々の内部にあるのではなく、「外在」しているはずである。そのことを言明している諸例：

－ル・クレジオ：「脳は外在する」→資料 txt15

（シンポジウムでの彼のコメント[札幌、06.1]：「われわれが夜に見る「夢」は、脳が外部へと出てゆく現象。作家の使命はそれを言語化すること」。→すなわち、夢：われわれの内部に眠る＜異郷＞）

→詩やアートこそは、実は、こうした「外在する脳」(宇宙の脳)とつながる営み。（←宮沢賢治：わたくしといふ現象は／〔……〕／＜あらゆる透明な幽霊の複合体＞）

－オクタビオ・パス：「生命は外部にある」→資料 txt16

インスピレーションは「外」からやってくる：「外在する生命(脳)」の訪れ、それとの交信の成り立ち。
 われわれが＜異郷＞に牽引されるのは、われわれの内部が＜異郷＞で浸されているから。その双方がつながろうとするから。

→人間は、こうしたありようにおいて、世界的にも自身に対しても、まさしく「異邦人」。

－荒川修作：「建築的身体」——「外在する生命」、「(私ではなく)われわれという公共的実体」を、人間の「生環境」として具体的な現実として構築してゆこうとするプロジェクト。→資料 txt17

（→アラカワ：詩作を放棄したのち、都市をつくろうとしたランボーの正統な後継者）

一例：「三鷹天命反転住宅——ヘレン・ケラーのために」(画像表示)

アラカワ・プロジェクトについて詳しくは HP: <http://www.architectural-body.com/>

- ・これらの思考は、文明史的に見るならば、実は、主体(理性の担い手としての「私」)と、世界(客体)とを切り離してきた西洋流の近代の知の組み換えとして展開されてきている。

ランボー：私というのはひとつの他者なのです。（デカルト的主体へのアンチテーゼ）

宮沢賢治：わたくしといふ現象は／〔……〕／（あらゆる透明な幽霊の複合体）

ル・クレジオ：パナマ・インディオたちの生：「脳は外在する」

実は、日本や東洋などの非西洋世界では、生命(人間、生きもの、万物)＝宇宙的流動的な実体として捉えられており（＝宮沢賢治：「あらゆる透明な幽霊の複合体」）、「外在する生命」という考えと親和性が高い。このように、「私」、「世界」、「生命」の捉え方を軸に、今や文明の巨大な転換が進行中。

6. 「ひとがわれわれと呼ぶ夢」

- ・「故国にあって悲しき者」、すなわち、どの地にあっても、自身の言語においても、そして自身に対しても、どこまでも「異邦人」たろうとした Tristan Tzara（←「おまえは他の者たちと向かい合っているおまえ以外のひとつの他者」[ツァラ]）。そうした彼の思考を凝縮した言葉：→資料 txt18

「言葉がその核のまわりに織る熱」：言葉が織る熱＝言葉は世界・生命を織り上げる素子(モノド)

「ひとがわれわれと呼ぶ夢」：そうしてその熱を通して現われてくる（「私」の単なる複数などではない）

講義メモ

果てなき異邦人としての人間

大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2

© OHIRA Tomohiko, 2009

多人称的な、トランスパーソナルな「われわれ」(＝荒川:Transhuman、パスの詩における「われわれ」[txt16])、「外在する生命」

- ・宇宙は「異邦」を通して進化してきた――。
- 宇宙という圏における異邦人:生命
- 生命という圏における異邦人:人間
- 人間という圏における異邦人:詩、アート
- すべては「異郷」同士でつながっている。その通路を生きること:「果てなき異邦人としての人間」。

大平最終講義 (09.3.13)

「果てなき異邦人としての人間——言葉・アート・心・生命とく異郷>」 関連テキスト(下線、大平)

1 聖ヴィクトールのフーゴーの言葉 (サイード『オリエンタリズム』より)

故郷を甘美に思う者はまだ嘴の黄色い未熟者である。あらゆる場所を故郷と感じられる者は、すでにかなりの力をたくわえた者である。だが全世界を異郷と思う者こそ、完璧な人間である。

2 トリスタン・ツァラ『近似的人間』より

鐘は理由なく鳴りそしてわれわれもまた
なぜわれわれを鎖につなぐ鎖の端を探すのか
鐘よ理由なく鳴れそしてわれわれもまた
われわれはわれわれの内部で鳴らすだろう 砕けたグラスを
贋金に混ざり込んだ銀貨を
戸口には深淵が広がっているかも知れぬままに
哄笑と嵐となって砕け散った祭典の残骸を
空気の墓を 北極の骨を砕く風車を
われわれの頭を天空に運び
われわれの筋肉に溶けた鉛の夜を吐きかける あのもろもろの祭典を

3 瀧口修造「絶対への接吻」より

ぼくの黄金の爪の内部の瀧の飛沫に濡れた客間に襲来するひとりの純粹直観の女性。彼女の指の上に光った金剛石が狩獵者に踏みこまれていたか否かをぼくは問わない。彼女の水平であり同時に垂直である乳房は飽和した秤器のような衣服に包まれている。蠟の国の天災を、彼女の仄かな髭が物語る。彼女は時間を燃焼しつつある口紅の鏡玉の前後左右を動いている。人称の秘密。時の感覚。おお時間の痕跡はぼくの正六面體の室内を雪のように激変せしめる。すべり落された貂の毛皮のなかに発生する光の寝台。彼女の気絶は永遠の卵形をなしている。水陸混同の美しい遊戯は間もなく終焉に近づくだらう。乾燥した星が朝食の皿で轟々と音を立てているだらう。海の要素等がやがて本棚のなかへ忍びこんでしまうだらう。やがて三直線からなる海が、ぼくの掌のなかで疾駆するだらう。彼女の総體は、賽の目のように、あるときは白に、あるときは紫に変化する。空の交接。瞳のなかの蟹の声、戸棚のなかの虹。

4 トリスタン・ツァラ「ダダ宣言1918年」より

われわれに必要なのは、強靱で、直截で、的確で、かつ永久に理解されることのない作品である。

5 プルーストの言葉

美しい書物は一種の外国語で書かれている。

資料

果てなき異邦人としての人間
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

6 ドゥルーズの言葉

通常われわれは別の言語においてしか異邦人になることはできない、しかし大事なことは逆に、ほかならぬ自分自身の言語において異邦人であること。

7 グリッサンの言葉

多言語主義とは諸言語の共存のことでも、複数言語を知っていることでもなく、自身の言語を使用する時に、そこに世界の諸言語が立ち現れている状態のことである。

18、19 世紀において、フランスの作家は英語やイタリア語やドイツ語を知っていたとしても、彼が書くときにはそのことを考慮することはなく、エクリチュールは単一言語的であったのに対し、今日では、作家は他のいかなる言語を知らずとも、実際に彼が書く過程では、彼の周囲に広がるこうした諸言語の存在を、意識しているかどうかにかかわらず考慮しており、ひとはもはやあるひとつの言語を単一言語的に書くことはできず、諸言語の想像的なもの〔世界のあらゆる言語に立ち会うこと〕を考慮せざるを得ないのだ。

アメリカ人すなわち合衆国人のように、世界のそれぞれの言語に内在するこうした問題を想像しない者たち〔自らの言語を単一言語的にしか考えられない者たち〕は、世界を想像することすらしない。

＊「われわれカリブ人は、四つや五つの異なる言語で書いているが、われわれが行なっているのはひとつの同じ言語活動なのだ。」(キューバの作家カルペンティエルの言葉。グリッサンによる引用)

8 ゲーテ、ベンヤミンの翻訳論

このような性質の翻訳〔原典の代替物ではなく原典と同等の位置におかれることを求める翻訳〕は、はじめは最大の抵抗に会わねばならなかった。というのも、原典に密着する翻訳者は、多かれ少かれ、自国の独自性を放棄することになり、そこに成立する第三のものへ、一般の嗜好を引き寄せるにはなお日時を要するからである。(ゲーテ)

われわれの持つ翻訳は、最上のものでさえ、ある誤った原理にもとづいている。それらはドイツ語をインド語、ギリシャ語、英語にしようとはせず、インド語、ギリシャ語、英語をドイツ語にしようとしているのだ。自国語の慣用の方を、他国語作品の精神よりもはるかに尊んでいるのだ[……]翻訳者の原理的な錯誤は、自国語がたまたま現在そうあるにすぎない形状に、後生大事にすがりつくばかりで、自国語を他国語によっ
てはげしく揺り動かそうとは夢にも思わぬことである。翻訳者は、極めて疎遠な国語から翻訳する場合
にはとりわけて、言葉とイメージと音調とが一体になる言語そのものの究極的根元に、戻って行く必要がある。自国語を、他国語によって
上げ、かつ深める必要がある。(ベンヤミン)

9 セガレンの言葉

<エグゾチスム>の感覚とは、異なるものの観念以外の何ものでもない。<多様なもの>の知覚、何か
が自分自身ではないという認識以外の何ものでもない。そしてエグゾチスムの力とは、異なることを把握

する力にほかならない。

自己を把握するあらゆる存在は必然的に自己を自分とは異なるものとして把握する。

存在が高揚するのは、＜差異＞によって、そして＜多様なもの＞の中においてである。

自分の見たものをまったくその通りに述べるのではなく、自分の存在の反響を、瞬時の、恒常的な転移(*transfert*)によって語ることは、技巧の程度にしたがって変化する芸術の階梯の中では、一段上のものではなかろうか。(強調、セガレン)

10 ルヴェルディのイメージ論

イメージは精神による純粋な創造物である。

イメージは何らかの比較によって生まれるのではなく、多少ともかけ離れた二つの現実を接近させることから生まれるのである。

11 「私」をめぐる言葉

私が考える、と言うのは間違いです。不特定な誰かが私を考えている、と言うべきでしょう。[……]私というのはひとつの他者なのです。(ランボー [強調、ランボー])

[参考] 一つの思想というものは、「それ」が欲するときにやって来るもので、「われ」が欲するときにやって来るのではない。従って、主語「われ」が述語「思う」の条件である、と言うのは事態の一つの偽造である。(ニーチェ [強調、ニーチェ])

わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／(あらゆる透明な幽霊の複合体) (宮沢賢治)

現し世の全体をぼくらは／ぼくへと、ぼくという多数へ／ぼくという小麦粉へと挽ききざんでいるのだ。(フレーブニコフ)

12 木村 敏『あいだ』より

われわれは人間である前に、なによりもまず生物である。生物である以上、われわれは生命一般の根拠とのつながりを絶えず維持し続けなければならない。しかしこの「生命一般の根拠」は、個々の生命体に宿った生命現象とは違って、対象的に捉えることができない。[……]われわれが主体として、あるいは自己として生きてゆくということは、この客観化不能な「生命一般の根拠」との関係そのものを生きてゆくということにほかならない。

この「生命一般の根拠」とのつながりを維持し続けるために、生命は不断に変化する外界にそのつど対応して自らの内界を変化させてゆかねばならない。有機体と外界との接触面で内界のこの刻々の変化を司っている原理を(ヴァイツゼッカーにならって)「主体」と呼ぶならば、このような主体は——一般に「主体」

資料

果てなき異邦人としての人間
大平具彦『文化を読み直す』CATS 叢書 Vol. 2
© OHIRA Tomohiko, 2009

という概念がわれわれの意識や反省作用を前提として語られているのとはまるで違って——生物が生命一般の根拠との関係を失わないかぎり、意識や反省とは無関係に働き続けている原理だということになる。われわれが「自己」と呼ぶものもこの生物学的主体の延長線上にしか考えられないものであって、自己とは要するにわれわれと世界との「あいだ」に働いている、世界との関わりの原理にほかならないのである。

13 河野哲也『〈心〉はからだの外にある』より

私たちは環境を所有することで、環境に所有される。環境の所有とは環境を身体化することである。所有は、この意味で、自-他、主観-客観の二分法を越えている。

心は身体と環境との関係性のなかで成立するという意味においては、まさしく「身体の外にある」と言えよう。生態学的な立場にとつての自己とは、あくまでも環境に立脚し、自然的・人間的・社会的環境との相互作用のなかで成立する身体的存在に他ならない。

[参考] 下條信輔『〈意識〉とは何だろうか——脳の来歴、知覚の錯誤』より

逆説的に聞こえるでしょうが、意識のもっとも意識らしい頂点の部分において、心は、無意識の領域へ、そして生理、身体、世界へと際限なく漏れ出すのです。

14 ジェイムズ・クリフォード『文化の窮状——二十世紀の民族誌、文学、芸術』より

人類学的ヒューマニズムは、差異に始まり、——名づけと分類、描写および解釈を通して——差異を理解可能なものとする。つまり、見慣れたものにするのである。民族誌的シュルレアリスムは、それとは対照的に、他者性の侵入すなわち意外性を呼び起こすことにより、見慣れたものを攻撃する。

15 ル・クレジオ『悪魔祓い』より（パナマ・インディオたちが夜に奏でる葦笛の音楽についての記述）

言葉を殺すための音楽、言葉よりも早く進むための音楽。理解するための音楽ではなくて、苦しくて、極度に意識的な熱狂。するとたちまちのうちに、宇宙の模様が見られ、聞かれ、感ぜられ、知られる。一閃のきらめきのうちに社会のかなたに達する音楽。歴史や図面や地図がなんになるうか。もはや個人もなければ、支配もない。問いもないし答もない。粉碎された対話。頭脳は外部にある。そのことだ、恐ろしくて美しいのは。頭脳は外部で生きているのだ。

16 オクタヴィオ・パスの詩より（詩集『太陽の石』の一節）

私ではなく、私は存在せず、われわれはいつもわれわれであり、
生命は他者であり、いつも彼方にあり、さらに遠方にあり、
おまえの外部にあり、私の外部にあり、いつも地平線であり、
われわれを誘引し、忘我させる生命

17 荒川修作「建築的身体」

「手続きを通した建築」とは、[……] 世界がつくりだす環境を手続きを通して拡張し、[……] 私たちがイメージできない「生命」を外在化、いや生命を構築するための手続きです。[……] 私とか主体と呼ばれ使われている身体を「有機体-人」に分けることによって、与えられた環境をつくり変え、私たちの「有機体-人」の持っているすべての多層的、多元的な多様体としての可能性の拡張を図り、その働きや行為、每秒移り変わっていく環境から、「遍在としての場や場所」を出現させるのです。(『水声通信』7号)

18 トリスタン・ツアラ『近似的人間』より

私は言葉がその核のまわりに織る熱のことを考える
ひとがわれわれと呼ぶ夢

大平具彦略歴

大平具彦（おおひら　ともひこ）

1945 年富山県生まれ。北海道大学名誉教授。

東京外国語大学（フランス語科）卒業。東京都立大学大学院博士課程（フランス文学専攻）中退。同課程在籍中、フランス政府給費留学生としてニース大学に留学し、ダダ運動の著名な研究家ミッシェル・サヌイエ教授に師事。北海道大学言語文化部教授を経て、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院教授。専門は、表象文化論、国際地域文化論。

主な著書に、『モダニズム研究』（共著、1994、思潮社）、『トリスタン・ツァラ——言葉の四次元への越境者』（1999、現代企画室）、『モダニズムの越境』（全 3 巻、共著、2002、人文書院）、『20 世紀アヴァンギャルドと文明の転換——コロンブス、プリミティヴ・アート、そしてアラカワへ』（2009、人文書院）。翻訳に、ミッシェル・サヌイエ『パリのダダ』（共訳、1974、白水社）、トリスタン・ツァラ『トリスタン・ツァラの仕事 II——詩篇』（共訳、1989、思潮社）、ジャック・ブーヴレス『哲学の自食症候群』（1991、法政大学出版局）、アンリ・ベアール／ミシェル・カラスー『シュルレアリスム証言集』（共訳、1997、思潮社）など。

本書の著作権の取り扱いについて

- ★ 本書に関する一切の著作権は、大平具彦に帰属します。出典を明記された上での学術・非営利目的の引用はこれを禁じるものではありません。記載内容に関するお問い合わせは北海道大学観光学高等研究センター（連絡先は巻末を参照）までお願い申し上げます。
- ★ なお、Web 版についてはクリエイティブ・コモンズの表示-非営利-継承 2.1 日本ライセンスの下でライセンスされています。詳しい利用条件に関してはライセンスページ記載事項 <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/> をご参照ください。



CATS 叢書 第2号

文化を読み直す——退職記念講演録

2009年6月15日発行

著 者 : 大平具彦
製作・編集 : 山村高淑（北海道大学観光学高等研究センター）
デザイン・表紙 : 山村高淑（北海道大学観光学高等研究センター）
校 正 : 木野聡子（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院）
発 行 : 北海道大学 観光学高等研究センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

TEL : 011-716-2111（代表）

e-mail: kankosozokenkyu@gmail.com

印刷・製本 : 北海道印刷企画株式会社

© OHIRA Tomohiko, 2009

Tomohiko OHIRA

Rereading the Culture: Valedictory Lectures

CATS Library

Vol. 2

Center for Advanced Tourism Studies

Hokkaido University